筑波大学新聞

第318号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL:
029(853)2040・6699
E-mail
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月 刊

発 行 所
筑 波 大 学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

# 学生が授業を「変革」

## 教員を公募 シラバスも作成

漂流する教室 ～スマホと授業～ 上

### 岡山大の試み

2012年8月。立命館大学（京都府）では、学生と教職員の議論が白熱していた。テーマは、どうすれば学生が積極的に大学の授業に参加できるか、だった。

さまざまな意見が出た。「授業内容について授業中、学生の議論の場を設けるのはどうか」と話す学生。別の学生は、SNSの使用を提案した。授業中に学生が授業への意見をSNSで発信。内容に対し教員が感想を述べる。さまざまな学生の意見を、即座に授業に反映させるアイデアだった。

「学生FDサミット・2012夏」。会場には、各大学の学生・教職員約430人が集まっていた。目的は、大学の教育改善だった。

FDとはFaculty Developmentの略。大学教員の教育能力の向上や、授業内容の改善などを目指す。米で1970年代に発足した運動で、日本でも文部科学省が推進。今では一般化した授業シラバスの作成や授業評価アンケートなどはその成果だ。だが、授業内容の改善を教員だけで話し合うのは不十分だ。「学生FDサミット」は09年から年に2回開催。学生が企画し、大学職員、教員が参加する。

成果は生まれつつある。

今年、東洋大学（東京都）で行われたサミットでは、岡山大学が、同大学で03年から開講する「学生発案型授業」について発表した。学生にどんな授業を受けたいかを調査し、学生が作った授業案をもとに教員の公募も行う。この上で、シラバスの作成から成績評価の方法まで学生と教員が一緒に考えるもので、参加者の注目を集めた。

昨年岡山大で開講されたのは「〝生きる力〟～料理等を通じて培うコミュ力～」。過去にも「ドラえもんの科学」（06年）などを開講した。これらの授業は、授業評価アンケートで学生の満足度も高かったという。サミットで岡山大の学生は「学生発案型授業の企画では学生・教職員で話し合い、授業案を作ることが大切だ」と強調した。

岡山大の影響は大きい。同様の授業は、札幌大、日本大、関西大、横浜国立大など全国の大学が追随。各大学の学生の評価も高い。学生FDを組織した一人、木野茂・立命館大教授も、学生が教員と作り上げる授業を行う岡山大の試みを称賛する。

同教授は、学生がいかに授業に参加・集中できるかについて、「学生が授業のあり方について積極的に提言するなど、教育を受ける側から問題を提起しなければ意味がない」と発言。一方、学生FDに参加する学生たちも「学生が授業を変える意識を持つことが重要だ」と話す。

◆ ◆

本紙の調査では、大学生の約9割が授業中にスマホを使い、うち約7割が授業に無関係の用途で使用していた。学生の中からは「スマホを使わなくていいような面白い授業をしてほしい」との意見もある。

授業は一体、どこに進むべきか。授業のあり方を模索する。（新田萌夏＝社会学類2年、ロゴデザイン・姉崎信＝心理学類2年）

# 共用浴場 赤字数百万か

## 学生生活課「値上げはしない」

**平成25年度に**

今年度から追越、一の矢地区の共用浴場が廃止になった問題で、廃止になった2つの浴場と現在運用中の平砂地区の共用浴場で昨年度、多額の赤字が出ていたことが分かった。筑波大学は数字を公表していないが、本紙の推計では赤字額は数百万円に上るとみられる。同浴場は今年度も赤字となる可能性があり、学生生活課は「浴場をなくさないためにも、多くの学生に利用してほしい」と話している。

共用浴場は1974年に平砂地区、76年に追越地区、77年に一の矢地区に設置。経営は民間業者に委託されている。

学生生活課によると、宿舎にコインシャワーが整備された平成21年度ごろから利用者が激減。経営が悪化し、昨年の9月に業者が大学に撤退を求めていた。大学側は継続を求めたが、追越・一の矢地区で廃止が決定。さらに平砂地区は消費税増税のため、今年度からは利用料金を170円から180円に値上げし、営業時間も短縮された。

同課によると、昨年度は3つの浴場を年間のべ約3万人が利用した。利用者約3万人で経営を維持しようとすると、料金を420円に上げなければならないという。だが値上げについて、「値上げして利用者が減ると意味がない」と否定している。

平砂浴場は現在のところ、平成27年度末までの運用が決まっているが、同課はその後の継続について「利用状況を見て業者と交渉していく」と話している。

公衆浴場はこの半世紀、その多くが廃業に追い込まれた。一般家庭に給湯設備が普及し、深刻な客離れが起きたからだ。

現存の公衆浴場をめぐる状況も厳しい。老朽化した設備の維持費、燃料費の高騰、増税などがその経営を圧迫している。（鈴木拓也＝人文学類3年、齋藤優斗＝社会工学類1年）

# 蹴球部2部降格

降格が決まり、うなだれる筑波大選手（11月15日、中央大戦で）

関東大学サッカー1部リーグの最終節が11月15日に古河市立古河サッカー場（茨城県古河市）で行われ、筑波大は中央大に1－2で惜敗した。筑波大は降格圏の11位に順位を落とし、戦後初の2部降格が決まった。来季は2部リーグで、1部復帰を目指す。（森脇慎＝社会学類2年、写真も。8面に関連記事）

# 学びを生かし、球界変えたい

## ソフトバンク新監督 工藤公康氏

インタビューに答える工藤氏（12月2日、総合研究棟Dで）＝田中開撮影

プロ野球ソフトバンクの監督に就任した筑波大学大学院の工藤公康氏（体育1年）が本紙の単独取材に応じた。筑波大でトレーニング方法などを学んできた工藤氏は「選手とコーチが（適切なトレーニング法についての）知識を共有していることが大切。だが、野球界ではまだまだ共有ができていない」と発言。この点については筑波大で学んだことを生かしながら「野球界で変えられるところは変えたい」と話した。

筑波大で「野球をする子どものけが予防」を研究してきた工藤氏はトレーニング方法について「知識がないと、正しいのか正しくないのかの判断がつかないし、トレーニングを続けても、（自分が）どう成長するかも分からない」と指摘。プロ野球でも間違ったトレーニングでけがをし、引退した選手が数多くいるとし、「野球界で自分が変えられるところは変えたい」と話した。工藤氏はプロ野球のキャンプで直線ダッシュを繰り返すことを例に挙げ、「実際の試合では直線的な動きは少ない。実戦で使う筋肉を鍛えないと、試合でけがをする可能性がある。実戦の動きに近いトレーニングも取り入れたい」と語った。

工藤氏はプロ野球の西武やダイエー（現ソフトバンク）、巨人などで活躍。引退後は野球解説者として活動し、今春から筑波大大学院に入学。人間総合科学研究科でスポーツ医学などを学んでおり、11月1日にソフトバンクの監督に就任した。

工藤氏は今春から通う筑波大大学院について、来年から休学することを明らかにした。現在研究中の「野球をする子どものけが予防」については「将来は、筑波大に戻ってきて研究したい」と話した。（鈴木拓也＝人文学類3年、森脇慎＝社会学類2年、9面に工藤氏の経歴と関連記事）

## 紙面から

出前公開講座 五輪メダリストが授業 2
おわびと検証 前号の紙面について 6
男子バスケ 61年ぶりの大学日本一 8
剣道 竹ノ内 全日本選手権で優勝 9
TDP 被災地にどんぐりを送ろう 10
3K棟 BBCニュース放映 11
ミニ特集 3 多くの学生が「ぼっち」恐れる
特集 6,7 「リケジョ」の未来を問う

## 筑波おろし

今月、リニア中央新幹線の建設が始まる。時速500㌔。東京―大阪間を最短67分で結び、2027年には、そのうち東京―名古屋間が開業する。総費用9兆円の壮大なプロジェクト。リニアが通過する山梨、長野、岐阜県など、沿線住民の期待は大きい▼山梨県出身である。それだけに、その期待感を身を持って感じてきた。同県の地元紙が県民100人に聞いたところ73人が「開業に期待する」と回答。「地方の活性化につながる」という意見も多い。東京まで最短34分となった岐阜県では「首都圏と一体となった経済圏を形成できる」（経済界）と喜ぶ▼だが、リニアには課題が山積している。ルートの約86％はトンネルだ。その掘削で出る残土をどう処理するのか。沿線の河川の水量や生態系に影響を与える可能性もある。日本と同じくリニアの開発を進めてきたドイツが、実験線での死亡事故などを受け、11年には開発を中止したという事実も無視できない▼半世紀前、東海道新幹線が開業した。世界で初めて時速200㌔を超える速度で客を乗せた「夢の超特急」は、いまだに列車事故では乗客の死者を出していない。リニアがそうした「安心感」を与えるためにも、計画を拙速に進めるべきではない▼時速500㌔の超特急は魅力だ。だが、山積する課題をどうするのか。「見切り発車」にならないよう、熟慮が必要だ。

# 出前公開講座が好評

## 大阪でも実施

## 五輪メダリストが授業

筑波大学の体育系の教員や学生が、全国各地を訪れ、スポーツ教室や講演会を行う「出前公開講座」を今年度から行っている。12月までに、佐賀県や福島県、大阪府で実施した。一流の指導者が訪れるため、地元住民から好評だという。出前公開講座を執り仕切る本間三和子教授（体育系・昭和61年度体育研究科修了）は「来年度以降も継続したい」と話している。（平嶋健人＝社会学類3年、写真も）

高校生に向けてスポーツ科学の講演をする本間教授（11月7日、咲くやこの花高校で）

これまで筑波大は一般市民や教職員向けに、芸術や科学などさまざまな内容の「公開講座」を実施してきた。だが、開催場所が大学施設内に限られていたため、大学施設から遠い人が講座に参加しづらかった。

一方、出前公開講座は学外の施設に教員が訪れるもので、地域の要望に合わせてプログラムを企画し、誰でも無料で参加できるのが特徴だ。筑波大になじみが薄い地域での大学の魅力のPRや、社会貢献などを目的としている。

9月には佐賀県で柔道教室（講師：増地克之准教授）が、10月には福島県で剣道教室（講師：鍋山隆弘准教授）が開かれた。特に柔道教室には、8月の世界選手権の団体戦で優勝した永瀬貴規さん（体専3年）が指導者として訪れ、参加した現地の教職員や高校生に好評だったという。

体育系では今後も、岩手県や宮城県での実施を予定している。

11月7日には同講座の一環として、本間教授による講演会が、咲くやこの花高校（大阪市此花区）で行われた。

同教授は1984年のロサンゼルス五輪のシンクロナイズドスイミングで銅メダルを獲得。選手、指導者、国際審判員としての経験をもとにスポーツ科学を研究している。当日は「スポーツ科学の知識を指導・練習に活かそう！」をテーマに講演。同校でスポーツを重点的に学ぶ「スポーツ系列」の生徒約70人や付近の高校教員などが訪れ、最先端の研究内容やシンクロ日本代表のトレーニング方法、同教授の選手時代の経験談に聞き入っていた。

同校3年で、陸上が専門の佐藤楓さんは「『どういうフォームなら速く走れるか』など、知的好奇心を持って日々の練習をする必要性を感じた」と感想を語った。

また、同校の平澤あず教諭（平成12年度体育専門学群卒）は「先端の研究に触れることで、勉強や部活動、大学進学に対する生徒のモチベーションを向上させることができた」と手応えを話した。

# ロボット倫理を考える

## 来年1月にシンポ開催

ポール准教授

筑波大学（人文社会科学研究科、同国際日本研究専攻）とドイツのフリードリヒ・エーベルト財団は来年1月23日、大学会館国際会議室で「ロボット倫理」を考えるシンポジウムを共催する。当日はドイツの学識関係者や、筑波大の専門家らがパネリストとして参加。近未来のロボットと人間の関係のあり方について行政、産業、教育などの面から話し合う。

シンポジウムを組織したポール・マルティン准教授（人社系）などによると、現在、技術の発展で軍事、医療、介護面など、ロボットが社会の多方面に進出しつつある。だがその場合、軍事面での使用の是非や、介護ロボットが人間に与える心理面での影響など、「ロボット倫理」を考える必要が出てくる。

今回のシンポジウムはこれらの問題を総合的に話し合うもので、筑波大からは山海嘉之教授（シス情系）、佐藤貢悦教授（人社系）、仲田誠教授（同）が参加。一方、ドイツ側からは欧州連合（EU）の「政府」にあたる欧州委員会で、アドバイザーを務めた学識経験者や政府関係者、在日ドイツ大使館幹部のほか、ロボット企業の関係者も参加を予定している。

ポール准教授によると、日本とドイツは▽技術立国で、ロボットへの関心も高い▽高齢化など同じ社会問題を抱えている▽国際社会への影響力が強い……など類似点が多く、ロボット倫理についての意見交換は有意義だという。同准教授は「筑波大はロボット技術の先端を走っており、大学がその工学、医療、倫理などの分野での能力を結集すれば、この問題で世界のトップを走ることができる」と話している。

（福原直樹）

# ダムの土砂をれんがに

## 貯水効果を高める

入江光輝准教授（生環系）らがチュニジアで行っている活動が、水不足の解決に貢献すると期待されている。同准教授らのグループは、ダムに堆積して貯水を妨げていた土砂を取り除き、れんがとして有効活用する方法を考案。現在は、土砂を原料にして、地下水のろ過装置を作る研究を行っている。

入江准教授によると、国土のほとんどが乾燥地帯のチュニジアでは、年間を通して降水量が少ないため、住民が自由に使える水の量が限られている。一方、同国は植物で覆われていない土地が多く、雨が降ると地表の土砂が流出。水資源の確保に不可欠なダムに土砂が溜まり、各地のダムの貯水効果が低下している。また、ダム建設に適した場所も少ないため、同国では水資源の確保が課題となっていた。

入江准教授は、ダムの貯水効果を高めるため、ダムに溜まった土砂に注目。①湖底に溜まった土砂を取り除く②その土砂を使ってれんがを製造③建築材などとして販売④販売利益で土砂を取り除く……という、循環型の事業モデルを考案した。市販品とほぼ同コストでれんがを製造でき、今後は現地の人と協力して安定した生産システムの構築を目指す。

また、チュニジアでは地下水に人体に悪影響を与えるフッ素が溶け込んでいる地域が多い。入江准教授は、ダムに溜まった土砂を原料にしたフィルターを開発。地下水を飲料水に変える安価なろ過装置の実用化に向けた研究も続けている。同准教授は「現地の研究者と連携を取るなどして、製品化を目指している。実用化されれば、水資源管理と地下水汚染の二つの問題が同時に解決できる」と話している。

（深作歩美）

筑波大で実証実験を行った超小型モビリティ（11月20日、本部棟付近で）

## 超小型モビリティ　筑波大で実証実験

鈴木勉教授（シス情系）らが、10月上旬から11月中旬、1～2人乗りの電気自動車「超小型モビリティ」の実証実験を筑波大学内で行った。つくば市から借りたトヨタ製の1人乗り超小型モビリティ「COMS（コムス）」2台を使用。鈴木教授が開講する「都市・地域解析学」の受講生が主体となり、学内での活用法を提案するため、学内でのアンケート調査のほか職員や学生15人を対象に試乗会を行った。

超小型モビリティは普通免許で運転が可能。小さな車体で運転しやすく、高齢者や環境に優しい移動手段として国土交通省が導入を進めている。つくば市は同省の認可を得て今年1月から全国に先駆けて公道での実験を開始していた。

今回の実験に参加した大学職員の女性は「筑波大は広いので、遠くへ書類を渡しに行くのに時間がかかる。超小型モビリティなら雨の日でも重要な書類を濡らさず運ぶことができる上、（自動車よりも）小さなスペースに停車できて便利だと思う」と話した。

今後は調査を踏まえ、学内での利用法を検討する予定だ。（油布知夏、写真も）

# 藻類培養施設を公開

## 顕微鏡で細胞観察

バイオ燃料を作る藻類「ボトリオコッカス」を培養する「藻類バイオマス・エネルギー大規模実証施設」（つくば市栗原）の一般公開が11月2―3日に行われた。来場者は顕微鏡で藻類の細胞の構造を観察したり、バイオ燃料の解説ビデオを視聴した。

ボトリオコッカスなどの藻類から作られるバイオ燃料は、ほかの植物から作られる燃料に比べて生産効率が高いため、石油の代替燃料として注目されている。

同施設は、国内初の屋外での藻類の大量培養実験を行っており、今年3月に完成。約2000平方㍍の施設で、水流を人工的に作ったり、二酸化炭素を水に溶かすなどして効率よく藻類を培養している。

同施設の担当者の鈴木石根（いわね）教授（生環系）は「屋外培養は猛暑や台風など天候の影響を受けやすいが、安定的に培養できるように、研究を進めたい」と語った。

一般公開に訪れた男性は「施設が本格的で驚いた。屋外での培養には困難な面も多くあるようだが、研究の進展に期待している」と話した。

（深作歩美）

# 催事

### 応援部WINS第3回単独公演

筑波大学応援部WINS第3回単独公演「桐華祭」が来年1月23日（金）につくばカピオ（つくば市竹園）で開催される。

主な演目は「筑波大学応援歌」、「学生歌『常陸野の』」、ハーフタイムショーなど。

午後7時開演予定。入場料は無料。

問い合わせ＝wins_tsukuba_cheer@yahoo.co.jp（筑波大学応援部WINS）

### ピアノ愛好会ニューイヤーコンサート

筑波大学ピアノ愛好会「ニューイヤーコンサート」が来年1月24日（土）につくばカピオ（つくば市竹園）で開催される。

クラシックピアノ曲をはじめ、オーケストラ曲のピアノアレンジや、ゲームBGMなど多種多様なプログラムを楽しめる。曲目は、ショパン作曲「スケルツォ第3番」、湯山昭『お菓子の世界』より「お菓子の行進曲」ほか。

午後6時30分開場、午後6時45分開演。入場料は無料。

問い合わせ＝plovers.tsukuba@gmail.com

詳細＝http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~piano（筑波大学ピアノ愛好会ホームページ）

### アカペラサークルDoo-Wop

アカペラサークルDoo-Wopのコンサート「Winter Live 2015」が来年1月25日（日）につくばカピオ（つくば市竹園）で開催される。

今回のテーマは「Dream Night」で、邦楽や洋楽などさまざまなジャンルの曲を歌い上げる。

午後5時40分開場、午後6時開演で、終演は午後8時30分。

問い合わせ＝dw.winterlive@gmail.com

# 投稿募集

e-mail
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
みなさまからのご意見をお待ちしております。

# 多くの学生が「ぼっち」恐れる

## 「一人でいるのを見られたくない」

「ぼっち」という言葉が大学生を中心とする若者の間で頻繁に使われている。「ひとりぼっち」の「ぼっち」で、一人でいる人を指す言葉だ。ツイッターには一人でご飯を食べる「ぼっち飯」や「ぼっちなう」……などのつぶやきが並ぶ。「ぼっち」という言葉が急速に普及した背景は何だろうか。筑波大学などで取材した。（鈴木拓也、廣岡里穂＝人文学類、林健太郎、平嶋健人＝社会学類、添島香苗＝生物学類）

## 「一人での食事は避ける」

### 筑波大生の声

筑波大生は「ぼっち」という言葉をどのように使っているのだろうか。

Hさん（生物2年）は、「昨年からぼっちという言葉をよく聞いたり使ったりするようになった」と話す。一人でごはんを食べている時に「ぼっち飯なう」とツイッターでつぶやいたりするという。またHさんによると、ほとんどの大学生は「ぼっち」を自虐的に使っている。「他人から『あの人は一人だ』と思われるのが嫌だから、その前に、自分から笑いのネタにしてしまう」のだ。また、「ぼっちという言葉を使うのは、友達がいる人。本当に友達がおらず、常に一人行動をしている人は使わない」と話す。ぼっちとは孤独な人ではなく、あくまで「ひとりぼっちで過ごしている」という状況を指すようだ。

「ぼっち」という言葉が使われるようになった背景にはツイッターの普及がある、とHさんは指摘する。「ツイッターで、友達が何をしているかをリアルタイムで簡単に知ることができるようになった。そのため、友達が誰かと楽しく過ごしている時に自分が一人でいると、一人という状況が寂しくなり、友達がいないようで恥ずかしく感じてしまう」と話す。

Hさんの指摘通り、「知り合いに『ぼっち』と思われるのが怖い」と告白するのはIさん（社学2年）だ。一人で学食に行ったりすることには抵抗を感じており、「知り合いが利用しそうな学食や大学近くのレストランで、一人でご飯を食べることは避けている」という。一人でいるところを知り合いに見られたくないからだ。

しかし、一人で行動すること自体は「自由だし、気楽な面もある。一人旅をするのも好き」と嫌いな訳ではない。Iさんは以前、ツイッターで頻繁に「ぼっちなう」などとつぶやいていた。Hさんと同様に「自分から『ぼっち』と言うのは『自虐ネタ』だ」ともいう。

「ぼっち」だと思われるのを恐れているのは、Iさんだけではない。Iさんは「まわりにも『ぼっち』と思われるのが嫌な人がいる」と話した。

ツイッターには「ぼっちなう」などのつぶやきが並ぶ＝平嶋健人撮影

## 「一人でいることに抵抗ない」

### 留学生の声

筑波大の日本人学生からは「一人でいると周囲の目が気になる」「一人でいるところを知り合いに見られるのは嫌だ」などの声が聞かれる。世界では一人で行動することはどのようにとらえられているのか。4人の留学生に聞いた。

**【マレーシア・女性（国総2年）】**

一人でご飯を食べたりすることは全く平気。周囲に「友達がいない人」や「寂しい人」だと思われることは全く気にしないし、（マレーシアでは）一人で食べている人をそういうふうに見る人はいない。一人でご飯を食べている知り合いを見ても「物静かな人なのかな」と思うくらい。

マレーシアでは、男女ともに一人で行動することを否定的に思う人はほとんどいない。

**【エストニア・女性（芸専1年）】**

一人で行動することに全く抵抗はない。一人で寂しく感じることはあるが、周囲に「寂しい人」と思われることを気にしたことはない。

周囲の人の目よりも自分の気持ちを優先して行動している。知り合いが多く利用する店で、一人でご飯を食べに行くことも、買い物に行くこともごく普通のことだ。

また知り合いでも知らない人でも、その人が一人で行動をしているかどうかを気にすることはない。

**【ドイツ・女性（比文3年）】**

ドイツでは一人で行動している人を蔑んだり、変な目で見ることはない。

日本で自身のことを「ぼっち」と言っている学生がいれば、この人は本当に一人で寂しいのだろうなと思い、心配してしまう。

一人で何かをする時も、友達と一緒に何かをする時も、とにかく「楽しむ」ことが大切。一人でも自分が楽しめればそれでいいと思う。

## 「団体行動が普通」

**【韓国・男性（比文3年）】**

韓国は個人行動よりも団体行動が優先される社会なので、一人で行動することはよくないと思われている。「何をするにしても誰かと一緒に」という感覚があり、一人で何かをするのは若者だけでなく、どの世代でも違和感がある。

一人で行動する際は、周囲に「他者と協調できない人」と思われるのが嫌なので、誰かに見られないようにする。一人でご飯を食べなければならない時は、知り合いがいない間に食堂に行く。

また日本では、カウンター席や一人カラオケなど一人専用のものもあるが、韓国はどこに行っても団体席しかない。日本よりも一人でいる人に対する視線は厳しいと感じる。

## 人に認められないと不安

### 専門家の話

「ぼっち」という言葉が普及した背景や若者の人間関係について、社会学が専門の土井隆義教授（人社系）に聞いた。

**――最近の若者が「ぼっち」という言葉を使い始めた背景は。**

社会が変化していく中で、人間関係に過敏になってきたことが考えられる。1970年代半ばから、サービス業に従事する人が増え、それにつれて対人関係に気を遣う人も増えた。さらに2000年代になると、多くの企業が社員に「他者と交渉する」ためのコミュニケーション能力を求めるようになった。

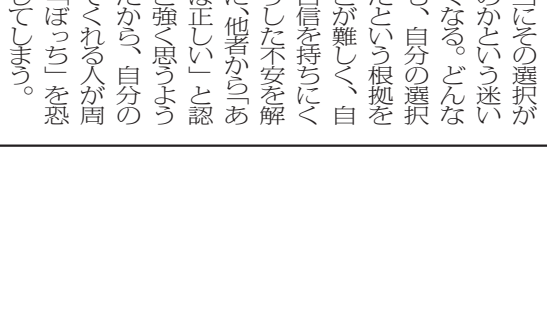
このような社会の風潮は子どもたちにも影響を与えた。子どもたちは学校で、コミュニケーション能力の大切さを教え込まれた。しかし、狭い学校空間の中で日常を送る子どもたちは、そのコミュニケーション能力を「他者と交渉する能力」ではなく、「仲間内で空気を読む能力」と読み替え、それが人間の価値を決めると錯覚した。そのため、仲間から外れることを極端に恐れ、「ぼっち」という言葉を使って、それを避けることを最優先するようになった。

**――若者は一人でいることを恐れているといいます。**

理由は二つある。一つは、人間関係の形が変わったことだ。かつては、例えば「同じクラスや部活であれば助け合わなければならない」といった考え方が今よりも強く、人間関係に強く縛られがちだった。そのため、関係のしがらみから解放されることが理想で、一人でいることは「一匹狼」と憧れの対象でもあった。

現在の人間関係は、かつてより比較的自由になった。それにもかかわらず一人でいるのは、個人のコミュニケーション能力や人間としての魅力の不足が原因ではないかと勘違いされやすい。そのため、一人でいることを恐れるようになった。

もう一つは、価値観が多様化したことだ。価値観が多様化し、数多くの選択肢が同じような価値を持つ社会では、本当にその選択が正しかったのかという迷いが生じやすくなる。どんな選択をしても、自分の選択が正しかったという根拠を見つけることが難しく、自分の選択に自信を持ちにくくなる。こうした不安を解消するために、他者から「あなたの選択は正しい」と認められたいと強く思うようになった。だから、自分の選択を認めてくれる人が周囲にいない「ぼっち」を恐ろしいと感じてしまう。


「ぼっち」が普及した背景について語る土井教授（12月2日、土井教授の研究室で）＝廣岡里穂撮影

## 周りの視線気にせず食事

### ぼっち席

京都大学の吉田キャンパス（京都市左京区）の中央食堂には、テーブルの真ん中についたてを立てた一人用の席（横並び3人がけ）がある。「周りの視線が気にならない席がほしい」などの要望に応えたものだ。学生からは「ぼっち席」と呼ばれ、全国の大学にも広がっている。若者から支持を集める理由は何なのか。食堂を運営する同大の生活協同組合や学生へのインタビューを通じ、ぼっち席の効果を探った。

**■運営側の声**

京都大中央食堂の関係者によると、ぼっち席が導入されたのは一昨年。大学生協の職員や学生、大学職員の意見交換会で要望が出たことから、同食堂の改修工事に合わせて「ぼっち席」の導入が決まったという。

導入後は、多くの学生が日常的にぼっち席を使うなど、好評だ。

運営側にもメリットが生まれた。昼休みの混雑時、ぼっち席では人がひっきりなしに座る上、短時間で食事を済ませる人が多いため、席の回転率が上昇。同食堂の関係者は「混雑が緩和された」と話す。

最近では、ネットなどで話題となり、ぼっち席目当てで同食堂を訪れる若者もいるほか、視察に訪れる他大学の職員も多いという。

筑波大学の学生生活課は「京大などが『ぼっち席』を導入したのは知っている。だが、筑波大では導入する予定はない」としながらも「学生から要望があれば考えたい」と話している。

**■京大の学生の声**

**【工学部2年・男性】**

一人で食べていると、周りの視線が気になる。だが、ぼっち席だと周囲がみんな一人なので、一人でいることが目立たなくなり、周囲を気にせず食事できる。

ただ、横の席に誰かが座ると、気になってしまう。

**【工学部3年・男性】**

知らない人と向かい合って食事するのは、気まずい。ついたてがあると、前の人の視線を気にせずに済むため快適だ。

**【人間・環境学研究科1年・女性（中国）】**

初めて利用する時は、写真を撮って中国の友人に自慢してしまった。それくらい珍しく感じた。

博士課程の人は、個人の研究が忙しく、食事をする時間を十分に取れないこともある。ぼっち席があると、すぐに食事を済ませられるので便利だと思う。

**【文学部4年・男性】**

食堂で知り合いがいると、時間を取られてしまうが、一人用の席だと無駄な会話をせずに済むため、急いでいる時などに使っている。自分が「ぼっち」だと感じたことはない。ぼっち席と呼ばれているとは知らずに使っていた。

京大に導入された「ぼっち席」（11月7日、京大吉田キャンパスで）＝平嶋健人撮影

# 記者の声

市原ひかり

## 日本の「おもてなし」の心
## 対価を求めず、他者を思う

東京五輪招致では、「おもてなし」の言葉が一躍有名になった。日本に来る人に、心のこもった歓待を行う……。いまやその言葉は、日本の「心」として世界に知れ渡るまでになった。だが、日本独自の「おもてなし」とは一体何なのだろうか。無論、それはカネにあかせた豪華な「接待」ではないだろう。また、それは外国、例えば英語圏のホスピタリティの心とどう違うのだろうか。「おもてなし」の意味を考えてみたい。

この夏、一人で北海道を旅した際、数々の親切に出会った。一人で歩いていたらカップルが車から声をかけてくれ、宿まで送ってくれたことがある。たまたま入った雑貨店では、年配の女主人が、おにぎりを作って食べさせてくれたことも。またゲストハウスで仲良くなった女性は別れ際、手製の弁当を持たせてくれもした。

どうして出会ったばかりの他人に、こんなに優しくしてくれるのか。ふと、「おもてなし」の言葉が頭をよぎった。これらの親切の背景には日本の「おもてなし」文化があるのだろうか、と。

だが、同時に思い出したのは、昨年夏、米国に行った時のことだ。旧友と再会したのだが、その家庭では毎朝昼晩、美味しい料理をたくさん作ってくれた。また、友達の誕生日パーティや、近所の観光地に連れて行ってくれたりと、最大限の歓待を受けた。

人を真心こめて歓待することを、英語では「ホスピタリティ」という。そして、私が米国で受けた歓待はホスピタリティ以外のなにものでもなかった。おもてなしとホスピタリティ。日本独自のおもてなしとは、どんなものなのだろうか。いや、それは果たしてあるのだろうか。

千利休の教えの一つに、「降らずとも傘の用意」という言葉がある。茶道を習う母が説明してくれたのだが、この場合「備えあれば憂いなし」という自分自身だけのことを考えているのとは違う、という。考えるのは、常に相手のこと。万が一雨が降ることを心配する客人のための「用意」だ。

母はこうも語った。

彼女の茶道の先生は毎回、短いお茶の時間のために一番奇麗な花を摘み、奇麗な着物を着て、奇麗な茶道具をそろえる。一番いい空間を作り出し、短い時間の中で客を最大限に「もてなそう」としているのだ、という。

日本のおもてなしとは、目に見える行為だけでなく、そのための心遣いや気配りなど、表には出ない「心」が大事だと思う。そしてそのためには相手と自分が常に同じ空間にいることを意識することが重要だ。

一方、専門家によるとホスピタリティとは、ホスピタル（病院）と語源が同じで元来、「施し」を意味する言葉だという。だが、いずれにせよ対価を求めず、他者を思う気持ちは同じなのだろう。もしそうならば、日本を訪れる外国人に日本の「おもてなし」の心を発信するのは、たやすいかもしれない。

来年4月から、私は社会に出て働き始める。仕事は広告の制作だ。企業と利用者の間に立ち、両者の求めるものを感じ取る必要がある。また、仕事以外でも、国籍、年齢、性別問わず、多くの人と出会うだろう。その時に、この日本のおもてなしの心を思い出し、相手との時間を大切にしたい。（社会工学類4年）

# 筑波時評

## 大学の自治は対話から
## 学生の熱い主張に期待

大学の自治では警察の介入が話題になります。大学の自治は尊重されるべきです。真実を求める熱い想いを大学は守ります。違法行為はどこの場所でも違法行為です。警察が介入する前に、「大学の自治」を語らなければならない前に、「研究」を通じて、誇るべき大学の自治の姿を社会に示しておくべきでしょう。

学生も大学の自治の担い手です。教員と同程度とまでは言えませんが、一定程度、大学の自治が認められます。学生運動の経緯はみなさんもご存知の通りです。他方で、学生運動の悲劇も見逃してはなりません。学生が統一的な意思決定に従わない同胞を私的制裁にかけてしまったのです。大人の古きを嫌っていながら、大人の真似事をしてしまっては、大人の失敗を繰り返すだけでしょう。

学生は青臭くて、幼稚で、知識が足りなくて、理想に燃えて、そして可能性の塊です。憎たらしいオジさんが口を挟むよりも、学生同士の組織形成や手続きの整備、意思決定の方が現実志向で、未来志向かもしれません。大人の作った道具はどれも不完全なものばかりです。

大学の自治の担い手として社会に対するメッセージの方法は学生に多彩に用意されているでしょう。社会の大きなうねりに学生の熱い想いは概して無視されるでしょう。他者を犠牲にしてまで実現されるべき大義は存在しません。自分の思い通りに相手は動いてくれないでしょう。恋愛がそうでしょうか。

偉そうな権威的なオジさんたちも同じ悩みを抱えているかもしれません。義理人情に縛られて、くたびれていますが、一応、かつての若者たちです。過去の郷愁にふけっても、未来は変わりません。歳を取ると良いことばかりが記憶に残り、苦々しい記憶は薄れていきます。若者の生意気で、希望を与えるメッセージを、かつて若い時代のあった教員は待っています。斬新で、創造的で、社会を「変革」する荒削りのアイデアを期待しています。大学は、真実を追求する熱い想いと未熟な可能性を守ることで機能するのです。

解決不能にみえる問題に対して、学生同士、教職員と学生、大学の構成員全てが対話することが大学の自治なのかもしれません。相手に対して「寛容」である事が、大学の自治を守り、社会の最先端の学問研究の場所として機能するのです。

メッセージが学生から社会に発信されることを期待しています。

**辻雄一郎（つじゆういちろう）准教授（公法学）**

人社系・准教授。京都大学法学研究科修士課程後、関西学院大学法学研究科博士取得退学。カリフォルニア大学バークレー校で法学修士と法学博士を修了。駿河台大学法学部准教授などを経て、2013年から現職。専門は憲法、情報法、環境法。

# 反射鏡

## 学内の自転車問題

広大なキャンパスを有する筑波大学では、ほとんどの学生が自転車を使っており、迷惑駐輪や自転車の盗難など「自転車問題」が開学以来の課題となっている。筑波大は昨秋、ICタグを用いた「自転車・バイク登録制度」を導入し、問題解決に乗り出した。その一方で、自転車を使う学生は自転車問題やICタグについてどう考えているのか。中央図書館周辺で聞いた。（井口彩＝社会学類2年、深作歩美＝生物資源学類1年）

**【現現1年・女性】**
駐輪スペースの外に止めてある自転車は邪魔だと思う。ICタグの効果は実感していない。図書館は一般の人も利用するので、（ICタグをつけていない）一般の人の自転車が盗難されやすくなるのではないか。

**【生物3年・女性】**
忙しい時、駐輪スペース以外の場所に止めてしまうことがある。スペース外に1台でも止めてあると、同じように止めてしまう。駐輪スペースを増やすべきだが、自分で空いている場所に駐輪するなど少しの手間で状況は改善するだろう。

ICタグは、放置自転車の撤去に役立っていると聞いたので、少しずつ活用されていると思う。

**【生資2年・女性】**
自宅から電車やバスで通学しているので、自転車はあまり使わない。走っている自転車の前を歩いて横切るのは怖いので、歩行者と自転車のスペースがはっきり分かれているといい。

**【生物1年・女性】**
（迷惑駐輪は）駐輪スペースが少ないのが原因ではないか。（大学構内が広い筑波大では）ほとんどの学生が自転車を使う。駐輪スペースの拡張が必要だ。ICタグはなぜ導入されたのか知らない。

**【教科2年・男性】**
点字ブロックの上に駐輪するのは良くない。ICタグをもっと利用して放置自転車の撤去を進めればいい。

**【応理3年・男性】**
駐輪スペースが少ない。特に、（受講する学生数が多い）総合科目の授業がある日の第三エリアは込み合う。ICタグは自分の自転車にも付けているが、活用されていない気がする。

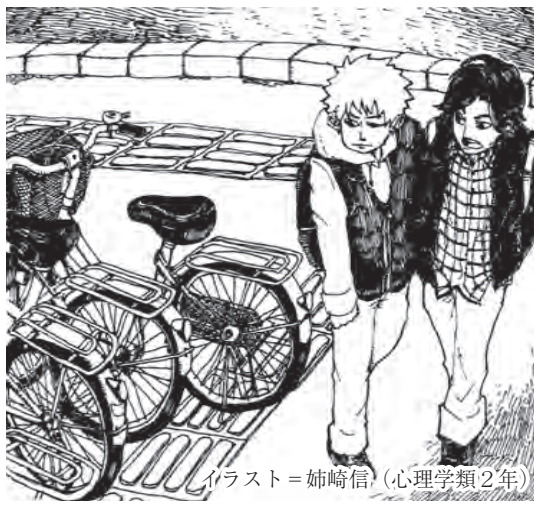
**【芸専2年・女性】**
話しながらゆっくり並列で走ったり、自転車の通行帯からはみ出す自転車が危ない。駐輪スペースを、教室に近い所に増やしてほしい。ICタグがきちんと機能しているかは疑問だ。

**【社学2年・男性】**
授業前は駐輪スペースが混雑するので、どうしても置き場所が足りなくなる。急いでいる時は、禁止されていると分かっていてもスペース外に止めてしまう。

**【教育3年・男性】**
大学が迷惑駐輪について注意喚起しているが、あまり学生に伝わっていないと思う。学生一人ひとりが意識を変えていくことが重要ではないか。

**【人文2年・女性】**
大学会館前のペデストリアンは道が狭く、自転車が渋滞しやすい。自分が歩いている時、（渋滞で並ぶ）自転車と接触して怖かったので、もう少しペデストリアンの幅を広げてほしい。

**【教育1年・男性】**
学生のマナーが悪い。例えば「自転車は道の左側を走行する」という基本的なルールすら守れない人が多い。自動車免許を取得する学生が増えれば、（交通ルールを学習し）マナーを身につけた人が増え、事故が減るのではないか。


イラスト＝姉崎信（心理学類2年）

## 今年の「漢字」

2014年も残すところあと数週間。今年はどんな一年だっただろうか。毎年12月に発表される「今年の漢字」になぞらえて、筑波大生に自分が思う「今年の漢字」を中央図書館周辺で聞いた。（加藤陽子＝国際総合学類1年、田中開＝教育学類1年、栗山菜帆子＝障害科学類1年）

**【情科1年・男性】**
今年の漢字は「多」。大学生活が始まり、新しいことや楽しいこともあったが、慣れない生活の中、つらいこともたくさんあった1年だったから。

**【エシス1年・男性】**
大学に入学して、勉強はもちろん、サークル活動に参加したり、一人暮らしをして自ら行動することを体感できた1年だったから「自」。

**【社工1年・女性】**
「拓」だと思う。入学して新しい友達がたくさんでき、また一人暮らしやサークル活動をする中で知らなかったことをたくさん経験したという点で、未開の地を拓いた1年だったから。

**【芸専2年・女性】**
「挑」。ボランティア活動など、新しいことに挑戦した1年だったから。

**【人社1年・女性（キルギス）】**
中央アジアのキルギスから日本に留学して、日本文化に触れるなど日本での生活を楽しめた1年だったから「楽」。

**【比文3年・女性】**
「ときめき太鼓塾」の活動でメンバーと音を奏でた1年だったから「奏」。

**【芸専1年・女性】**
大学生になって授業に空き時間ができて暇になるかと思っていたが、サークルやバイトで忙しくなった。時間の使い方が高校時代と変わったから「時」だと思う。

**【社学2年・男性】**
「頼」。勉強に行き詰まることが多く親や友人に頼る一方、サークルの代表に推薦されるなど誰かに頼られることも経験したから。

**【教育3年・男性】**
今年は消費税増税などの経済政策が目立つ1年だった。増税後、家計簿を見て物の値段が上がったことを実感したので、やはり「経」だと思う。

**【人文2年・女性】**
例年に比べて旅に行くことが多かったので「旅」。おじや祖母と一緒に奈良県や長野県の戸隠（とがくし）に行ったのが思い出に残っている。

**【教育1年・男性】**
大学に入学して講義を受けたり、初めてバイトをするなど新しいこと尽くしの1年だったので「新」。

## 土浦各流合同謡と仕舞の会

# 妖艶な舞で観客を魅了

### 能・狂言研究会が参加

土浦市やつくば市などで活動する能楽の団体が、流派を越えて能楽を披露する「土浦各流合同謡と仕舞の会」が11月16日に亀城プラザ（茨城県土浦市）で行われた。筑波能・狂言研究会も出演し「紅葉狩」「宇治の晒」の2演目を披露した。

通常、能は上演に1時間以上かかるが、今回は多くの団体が出演できるよう、演目の主要部分のみを演じる「仕舞」という上演方法で行われた。

能・狂言研究会は、平維茂の鬼退治を題材にした演目「紅葉狩」を披露した。もとになる能は、鹿狩りに来た維茂が、美女の一行と出会い、紅葉を楽しみつつ宴を始める前半部と、美女が鬼であることが判明し、維茂と鬼が激しい戦いを繰り広げる後半部に分かれる。今回は美女が紅葉を背に妖艶に舞うシーンを取り上げた。美女を演じた臼井山貴さん（人文1年）は、学園祭公演に続き2度目の「紅葉狩」となり、堂々とした舞で観客を魅了した。

新入生が例年になく多く入部したこともあり、続く狂言の演目「宇治の晒」でも同イベント唯一の学生団体として若々しい能楽を披露した。「宇治の晒」を舞った代表者の渡部海音さん（人文2年）は、「能楽は難しく手が出にくいと思われがちだが、素人の大学生でも演じることができる。活動を通し、能楽を身近に感じてもらえるとうれしい」と語った。

（田中開）

舞を披露する能・狂言研究会の学生（11月16日、亀城プラザで）＝筑波能・狂言研究会提供

## 絶対音感

M.A

# 信頼でつながる緻密な音楽

筑波大学ときめき太鼓塾の単独公演「颯奏」が、11月26日につくばカピオ（つくば市竹園）で開催された。同団体の単独公演は2年ぶりで、筑波大生やつくば市民ら約200人が訪れた。

太鼓塾の演奏で使われる太鼓は主に3種類。最も音が高く、曲のペースメーカーである「地打ち」の役割を持つ「締め太鼓」。肩から担ぐこともできる「桶太鼓」。そして最も音が低い「長胴太鼓」だ。太鼓に加え、小さなシンバルのような打楽器「チャッパ」や、音階を奏でる「篠笛」を組み合わせて曲を演奏する。篠笛を除き音階は無いが、太鼓の革を張る強さや使うバチの材質を調整することで、音程や音質を操る。

第一部は長胴太鼓を中心とした、力強く荒々しい楽曲が続いた。4曲目の「三宅」は、二人1組となり、6人が3台の長胴太鼓を、両面から腰を低く落とした姿勢で、全身を使って叩く曲。長胴太鼓の軽快な地打ちを土台に、4分音符や8分音符に打たれたアクセントが主旋律を刻む。アクセントの間隔は徐々に狭まり、主旋律が押し寄せる。鬼気迫る表情で太鼓を打つ団員の動きと、次々となだれ込む轟音の荒々しさは、会場を容赦なく飲み込み、圧倒した。

太鼓塾の舞台に「指揮者」はいない。もし誰かのリズムが少しでもずれてしまえば、音楽はたちまち狂い出し、崩壊する。しかし団員たちはアイコンタクトと豊かな表情でリズムを保ち、緻密な音楽を奏でる。確かな信頼でつながった彼らだからこそ、心を通わせ呼吸をそろえ、一つの音楽を作り上げることができるのだ。そこには、力強さの中に不思議な安心感さえ覚える。

第二部の幕開けは、この公演で太鼓塾を引退する3年生9人による曲「双飛」。軽やかな締め太鼓の16分音符に始まり、4人の女子団員が大空を羽ばたく鳥のように腕をしならせ、桶太鼓を叩く。その優雅な演奏からは、太鼓塾から巣立ち、未来へ羽ばたこうとする姿が浮かび上がる。第二部の中盤では1、2年生が沖縄民謡風の曲「アカバナー」を演奏。緊張混じりの若々しい演奏からは、次の世代を担う彼らの覚悟がにじむ。

そして舞台はアンコール曲「Queen」へ移る。桶太鼓を担ぎ中央に立つのは、現塾長の杉本隼（物理3年）と新塾長の菅原天真（社学2年）だ。桶太鼓と長胴太鼓は符点8分音符を賑やかに刻むも、篠笛はどこか物悲しい二短調を奏でる。杉本は菅原から一歩引いた場所で、しかし全身全霊を込めて桶太鼓を叩いていた。その音は自身の太鼓塾生活の終止符であり、菅原へのエール。そんな杉本の思いを受け取ったのだろう。舞台を終え、誰よりも声を上げて涙していたのは、菅原だった。

太鼓塾が響かせる太鼓からは、汗と涙が染み込んだ青春の音色が聞こえる。聞く人全てに勇気と希望を与えるその音は、これからも連綿と受け継がれていくことだろう。

（原啓一郎＝社会学類4年、写真も。12面に関連写真）

「Queen」を演奏する菅原（右）と杉本（左）（11月26日、つくばカピオで）

## MC展

# 制作の成果を発表

人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻で洋画、日本画、版画を学ぶ学生の作品を展示した第30回MC展が11月18―24日、茨城県つくば美術館（つくば市吾妻）で開かれた。同展は日頃の制作・研究の成果を学外に発表し、今後の制作の糧にすることを目的としたもので、54作品が展示された。

特に来場者の目を引いたのは、松井千夏さん（芸術1年）の「121」という作品。縦181㌢、横117㌢の白地の画面に121人の少女が描かれている。少女は全員同じ人物だが、ポーズや表情がそれぞれ違う。白と黒と灰色のモノトーンで構成されており、派手な作品ではないが、可愛らしいタッチで描かれた少女に、女性客が見入っていた。

つくば市から来た男性は「毎年来ているが、年によって作品のカラーが違って面白い。今年は力の入った作品が多くとても面白かった」と話した。

（姉崎信、写真も）

松井さんの作品「121」に見入る来場者（11月19日、茨城県つくば美術館で）

# 1年生が落語を披露

### 工夫効かせ笑い誘う

落語研究会の口演会「第2回秋の収穫祭」が11月22日にデイズタウンつくば（つくば市竹園）内のイベントホールで開催された。10月の第1回口演に引き続き、1年生を中心とした活気ある落語で観客の笑いを誘った。

落語では本題の演目に入る前に、「マクラ」という導入部がある。演目に関わる話や小咄で観客を物語の世界に引き込むことなどが目的で、演者の工夫が見所の一つ。今回も、演者の個性を生かしたさまざまなマクラが見られた。

「たけのこ」という演目を披露した筑波亭へる酔いこと荒井怜奈さん（生物1年）は、地元の北海道での風習をマクラに利用。北海道では旬の野菜をその都度食べるというマクラから、筍を巡るトラブルを題材にした演目を演じた。その後も、泥棒の失敗談を題材にした落語のマクラに、煙突が激減してサンタクロースが家に入れず困る話を取り上げるなど、工夫の効いた落語で観客を沸かせた。

代表の小林陽一郎さん（化学2年）は、「3年生が引退し、今回は1、2年生だけで運営したが、無事に終えることができた。今後も多くの落語会を開いていきたい」と語った。同団体は1月17日にも、ノバホール（つくば市吾妻）で「お笑い科学万博〝15～40周年記念ライブ～」を開催する予定。

（田中開）

## 知の一冊

# なりたい職業を幼児向けに紹介

### 『しごとば』鈴木のりたけ 著（ブロンズ新社）

大学の中で行う相談や、学外の業務で幼稚園や保育所、小学校や中学校に出向くことが多いため、障害のある、ないし障害を疑われる子どもたちと接する機会が多くあります。

一方、自分の子どもの世話をする中で、自分の子どもに与えた本が、仕事で接する子どもたちにも役立つと思ったり、自分にとっても示唆深いものだったりすることがあります。そのような本の一つとして、この『しごとば』を紹介したいと思います。

子どもが就労や職業を意識するきっかけになる本として有名なものに『13歳のハローワーク』（村上龍・幻冬舎）が挙げられますが、『しごとば』はもっと小さい子ども向けの絵本です。ですが、取り上げられる職業の中で使われる道具や設備、実際の仕事について詳細に取り上げられているため、大人も楽しく読める本として知られています。創刊から現在までにシリーズ5冊が発刊されています。取り上げられている職業は、幼児期前後の子どもたちがなりたい職業の上位にあるものだそうです。

自分の子どもが3歳の時に買い与えたので、もっぱら読み聞かせすることが多かったのですが、小学生になった現在は、自分でぱらぱらとページをめくってながめていることが多くなっています。

その中で、主に見ている職種も変わってきています。

以前はすし職人（職種が好きというより、すしが好きなだけでしょうが）のページばかり見ていたのが、最近では理容師のページや、看護師（3冊目の『続々しごとば』に掲載されています）のページを見ているようです。

本から得た知識を日常の遊びで生かしているようです。小学校入学前のままごと遊びは、布団をかけられたぬいぐるみを並べていただけでしたが、最近は診察から治療までを行っているようです。

子どもの発達の過程だといえばそれまでですが、大人から見れば同じ内容でも、発達過程にある子どもの感じ方は、時間が経つうちに変わっていくことに気付きました。

皆さんはどちらかといえば大人の視点でこの本を眺めるだろうと思いますが、機会があればぜひ手に取ってみてください。

**岡崎慎治 准教授（障害科学）**

人間系・准教授。筑波大学大学院修了、2004年に筑波大学心理・心身障害教育相談室非常勤相談員、05年から筑波大学大学院人間総合科学研究科講師、12年から現職。

# 女性研究者の今後は

## 女性教員20％が目標

女性の社会進出を促す声が目立つ中、大学・研究界では女性研究者育成に力を入れている。多くの研究者を輩出する筑波大学では、「リケジョ」（理系女子の意）の育成に向け、何を行っているのだろうか。今後の女性研究者育成のあり方を取材した。（井口彩、新田萌夏、平嶋健人、森脇慎＝社会学類、田中開＝教育学類）

### 筑波大の取り組み

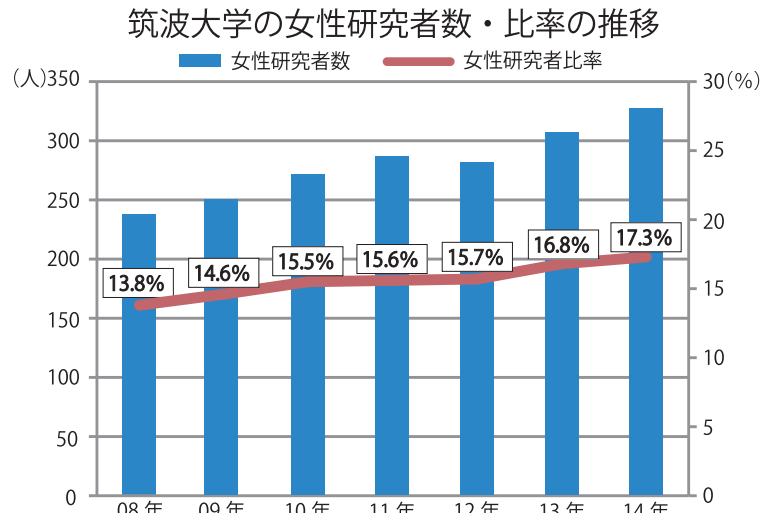
筑波大学の女性研究者支援の中心が、「ダイバーシティ推進室」だ。同推進室は2008年に「男女共同参画推進室」として設置され、12年に現在の名称に変更。現在17・3％である女性教員の割合を、平成35年度までに20％にするという目標を掲げ、さまざまな取り組みを進めている。

ダイバーシティ推進室は多くの支援を行っている。例えば、出産・育児を行う教員は、研究にかかる負担を減らすために、研究補助者やベビーシッターを雇うことがある。同推進室がこれらの費用の一部を負担し、研究と子育てを両立しやすい環境を作っている。また、学内に「ゆりのき保育所」「そよかぜ保育所」を開設したり、研究者や博士課程の学生向けに、子育てや進路などの相談に乗る「ワーク・ライフ・バランス相談室」あう」を設置している。

こうした活動の結果、女性教員の割合は、08年から14年の6年間で、3・5％増加した。また今年4月には厚生労働省から、仕事と育児の両立をしやすい環境と認められ「くるみんマーク」を取得した。

さらに、全国の女子中高生を対象に、実験の体験や「リケジョ」との交流会を行う「女子中高生理系進路選択支援プログラム」を実施。また、大学院に入学する学生には、出産・育児と研究を両立する教員を紹介した冊子を配布する。

だが、庄司一子室長（人間系・教授）は「（女性教員の割合など）数値の目標を立てているが、重要なのは大学や社会の意識が変わることだ」と語る。例えば、研究補助者を雇うための費用は男性も受け取ることができるが、受け取りを希望する男性は非常に少ない。庄司室長は「男性が積極的に子育てに関わることに、社会の理解が十分でないのではないか」と分析する。




### 識者の分析

樽川典子准教授

女性の社会進出はどのような流れをたどってきたのか。女性研究者は今後どうなるのか。ジェンダー社会論などが専門の樽川典子准教授（人社系）に聞いた。

（聞き手・新田萌夏）

1970年代後半の好景気による労働力不足で、家事・育児に専念していた女性が働き始めたことが女性の社会進出の発端だ。男女雇用機会均等法や、男女共同参画社会基本法の公布以降、企業の中に保育所が設置されるなど、女性が働く環境は整いつつあり、管理職に就く女性も増えた。

安倍内閣が「女性が輝く日本へ」をスローガンに、女性の社会進出を促している。だがその政策は景気回復ばかりに目が向いている。性別に関わらず活躍できる社会を目指すならば、まず性別によって役割分業するシステムをなくすべきだ。例えば、男性も育児休業は最長で3年間取得できる。だがほとんどの人が取得せず、取得しても1、2カ月に留まる。男性が長期の育児休業をとれるような職場づくりが必要だ。

◇

研究者に焦点を当てると、従来は大学院の入学者と研究者の男女比に著しく差があった。女性が研究者になることに消極的な風潮があったり、「優秀な男性研究者がいることが学術的な権威」とする傾向が原因だとされる。1999年に男女共同参画社会基本法が施行されてから、大学でも女性教員の育成推進などの取り組みが本格化した。

その結果、文部科学省の調査によると、全大学の女性教員は99年には約2万人で割合は約13％だったが、2014年は約4万人に達し、割合は約23％と過去最高を更新した。国立大学では、01年には約8％だったが、13年には約14％となっている（国立大学協会調べ）。国立大学では私立大学や短期大学に比べ、やや少ない傾向にあるものの、増加し続けている。今後少子化の影響で大学の規模が縮小し、研究者は狭き門となる。だが現在の女性雇用推進の流れを考えると、女性の比率が低くなることはないだろう。

研究者は他の職業と違い、養成期間が長い上に就職できる保証はない。できたとしても、非常勤の場合もある。結婚や出産を、よく考える必要がある。

女性の社会進出を促す風潮を支持する人は多いが、一方で「家事・育児を優先したい」と感じる女性も多い。これから求められているのは、男女関係なくそれぞれの目標を達成できるような社会だ。そのような社会で、研究者という職業が将来の選択肢のひとつに加われば良い。

また、「女性の中に『リーダーは男性に担ってほしい』というような意識が残っているように感じる」と話す。ダイバーシティ推進室では、シンポジウムの開催などを通し、意識の変化を促している。

庄司室長は「女性の社会進出を進めるためには、継続的に活動していくことが必要。研究者に限らず、大学に関わる全員にダイバーシティ推進室の活動を知ってもらいたい」と話した。

# 社会の活力に女性の力

### 内閣府の方針

日本全体で見た女性の社会進出の現状とそれに対する国の方針はどのようなものなのか。内閣府男女共同参画局から文書で回答を得た。

**――日本の女性の社会進出の状況と問題点は。**

内閣は、女性が自らの希望に応じ、家庭・地域・職場などで個性と能力を十分に発揮し、輝くことができる社会の実現を目指している。

現在、出産を経験した女性の約6割が離職している。人口が減少する中で持続的成長を実現し、社会の活力を維持するためには、最大の潜在力である女性の力が不可欠だ。

そのためには、女性が育児や介護などの状況に応じ、柔軟な働き方ができる環境整備が必要だ。また、子育て後の再就職先もパートなどの非正規雇用が多い。正社員として再就職を望む女性への支援や非正規雇用で働く女性の処遇改善など、働きたいと考える女性を後押しする社会を実現していきたい。

**――「リケジョ」と言われる女性研究者に対する取り組みは。**

女性研究者については、文部科学省をはじめ各省が支援を進めている。文科省では、女性が研究と出産・育児を両立できるよう、積極的に取り組んでいる研究機関を対象に、重点的な経済支援を行う「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」が進む。また、内閣府では「理工チャレンジ」というホームページを開設。女子高校生や女子学生の理工分野への関心が高まるような情報を発信している。

理工分野への関心を高めるサイト「理工チャレンジ」

## 訂正とおわび

先月発刊の筑波大学新聞第317号（11月4日付）では、誤報が2つありました。いずれも短い訂正記事では説明できない内容で、取材先をはじめ、ご迷惑をおかけした関係者の方々には、深くおわびいたします。

ここでは、本来掲載されるべき記事を再録するとともに、誤報が生じた経緯について検証した結果を、説明したいと思います。

（本紙編集代表・福原直樹＝筑波大学教授）

### ▼訂正Ⅰ

7面の写真説明では、海後宗男准教授（人社系）が「授業中のスマホ利用を禁止している」と記述しましたが、同准教授は基本的に授業で学生のスマホ利用を禁止しているわけではなく、写真説明は事実ではありません。

### ▼訂正Ⅱ

6面の「教員の態度と相関関係」の記事で、安東恵実さん（教育4年）が教員に対して批判的であるとの印象を与える表現がありましたが、安東さんは教員の授業態度を批判したり、熱意の欠如を指摘しているわけではありません。文章中に誤解を招く表現がありましたので、以下のように全記事を訂正いたします。

安東恵実さん（教育4年）は、卒業研究として「現代の大学生の主体的な授業参加」をテーマに、大学生の授業中におけるスマホの使用実態について調査している。

安東さんは7月から8月上旬にかけて39人に対し授業への意識や態度、要望などを聞いたアンケート調査を行った。その結果、全体の75％に上る学生が授業中にスマホを使用していたことがわかった。

また、教員に対しては「伝える姿勢が感じられない」「下を向いて話し続けないでほしい」など要望が複数挙がったことから、安東さんは「学生は教員の態度をよく見ている。学生の授業のとらえ方は、学生自身の授業態度やスマホ使用と関わっているようだ」と話した。

一方、授業中にSNSを利用することで、学習効果を高めている学生がいることもわかった。同じ授業を受けている友人と授業中にツイッター上で授業内容について議論をすることで、理解が深まったケースがあるという。本紙のアンケート調査でも授業中のスマホの使用について「授業内のディスカッションであまり発言できない内気な人にとって、ツイッターは自分の意見を表明し、反応を得られる貴重な場だ」とする意見があった。

安東さんは「学生のスマホ使用の現状を見つめ、主体的な授業参加の可能性を探っていきたい」と語った。

### ▼検証

筑波大学新聞では、締め切りまでに次のような編集の過程を取っています。①取材記者が原稿／写真（写真説明付き）を出稿②編集者が内容を確認したり、文章を直す一方、校閲担当も誤りを訂正③編集者らが直した原稿などをもとに見出しを付け、ゲラ（下刷り）を作成④記者／編集者が、取材先に再確認しながらゲラを精査……の過程です。

今回の訂正は一にも二にも、上記④の過程をきちんと踏まなかったために生じたものでした。

特に「訂正Ⅱ」の誤りは、取材先から誤りの指摘を受け、原稿を直していながら、その原稿が掲載されたかどうか、ゲラでの最終確認を怠った上、取材先の名前も誤って掲載してしまいました。また「訂正Ⅰ」は、写真説明について、取材先にきちんと確認を取らなかったため起きたものです。いずれも、初歩的なミス以外のなにものでもありません。

### ▼誤報の問題点

誤報はひとたび起きれば、いくらそれを訂正しても、後々まで取材先の社会的評価に影響したり、場合によっては人権侵害に発展する可能性もあります。本紙は発行部数2万部以上。その責任は重大です。今回の問題を決して忘れることなく、より良い紙面を作っていきたいと考えておりますので、ご理解をお願いいたします。

# 研究と家庭の両立は可能？

## パパとママのチームワーク

### 育児を経験して

実際に研究者として活躍する女性は、どのように研究と家庭を両立しているのか。6歳と8歳の娘を育てながら筑波大学附属病院で働く坂田麻実子准教授（医学医療系）に聞いた。

坂田准教授が第一子を出産したのは、大学院4年（30歳）の時。「ようやく研究員として自立し、（生活や家計が）安定してきたので子どもを産むことに迷いは無かった」と話す。

出産後8週間の休みを経て研究に復帰。だが、育児は想像以上に厳しかった。生後間もない子どもは、母親がいなければ泣き止まないことが多い。子どもが病気がちで、研究室を抜けて保育園に向かうこともあった。出産前のように一日中研究に没頭することは難しくなり、「実験を続けるだけで精一杯。研究も育児も中途半端になるのではと不安だった」という。

忙しい日々を支えたのは、同じ医者である夫だった。毎週夫婦で相談し、夫が家事を担当する「パパの日」と自分が担当する「ママの日」に平日を分け、担当の日は定時に研究室を出て、子どもの送り迎えや食事、洗濯などを行うことに決めた。「パパの日」には夫に育児を任せ、出産前のように研究にじっくり取り組める。「研究と育児の両立がしやすいし、子どももパパの日とママの日それぞれを楽しんでいるのでは」と話す。

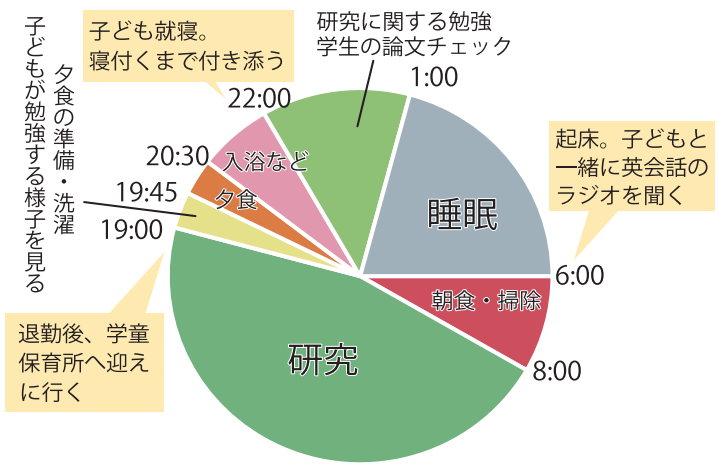
夫以外の協力者も多い。海外出張で長期間家を空ける時は、自分や夫の両親が子どもの面倒を見る。子どもが幼いころから家事や育児を手伝うシッターは、家族にとって大きな存在だ。「誰かに育児を任せる時の秘訣は、その人のやり方を尊重すること。自分のやり方と違う点があっても、それを楽しむ気持ちが大事」と同准教授は話す。

現在坂田准教授は、筑波大ダイバーシティ推進室が実施する「育児との両立を促進するための研究補助者雇用経費助成制度」を利用している。この制度は、育児中の研究者が自身の負担を軽減するために雇う、研究補助者の人件費を大学が助成するものだ。同准教授は、学生アルバイトに器具や試薬の準備などをしてもらう一方、研究計画の立案など自分しかできない作業に専念する。

「育児も研究も『チームワーク』が何より重要」と坂田准教授は話す。「一人で全てをこなすのは無理があるが、分業すれば困難を分かち合うことができる。家族だけでなく、保育園の母親仲間や職場の人など、周りの人と一体となって子育てすべきだ」と語った。

育児の経験が研究に生きたこともある。「（育児をしたことで）周りと協力するという考えを持つようになった。子どもがいなかったら、今とは違う自分がいたかもしれない」

紅葉を背景に、２人の娘とほほ笑む坂田准教授＝本人提供




坂田准教授の「ママの日」の１日

## 視点

11月の衆議院解散に伴い、女性活躍推進法案が廃案になった。これにより、女性が働きやすい環境づくりが大きく遅れる恐れがある。現在の情勢で女性の社会進出を推進するならば、それを妨げる原因になっている「男は外、女は内」という社会の意識を変えなくてはならない。

社会の意識を変える第一歩になるのが、大学や研究界での女性の進出だ。大学は多くの人が、結婚や出産を経験する前に通う場所。学生にとって、そこで働く研究者は先に社会に出た「人生の先輩」だ。研究者、それも女性が、仕事と育児を両立していれば、研究者を目指す女性だけでなく、他の分野に進む女性にも希望を与えるだろう。

また「リケジョ」の社会進出を推進することは、今まで男性の「聖域」だった研究職場などに変化を促す。従来、女性がなりづらかった職業に、女性が就職しやすくなるよう支援すれば、固定観念が覆り、就職先は多様になる。国立大学の女性教員は2001年の約8％から13年までに約6％上昇したが、まだ約14％と低く、根強い支援が必要だ。

筑波大は他の国立大学よりも、女性研究者の数を大きく伸ばしている。筑波大の取り組みが大学・研究界をリードするだけでなく、社会を動かすかもしれない。（森脇慎＝社会学類2年）

## 筑波自然図鑑

### ◇ジョロウグモ◇

紅葉が風に吹かれ、ジョロウグモの網にかかったのを見た。ジョロウグモの網は、巨大かつ最も複雑な構造をしたクモの網だと言われている。ジョロウグモの視覚は退化していて、獲物を捕まえる時には、網から伝わる振動に頼っている。この時のジョロウグモは、網に落ち葉が引っかかった振動を、獲物だと勘違いしたらしい。落ち葉に襲いかかり、毒を注入しようと噛み付いた。しばらくすると、それが獲物ではないと気づき、落ち葉から離れた。秋になって獲物の虫が少なくなり、飢えていたのだろうか。見ていて切なくなった。（写真・文＝今田創、比文2年、野生動物研究会）

撮影地＝一の矢地区

## HELLO！先端科学

### 特定の細胞を区別可能に

### がん研究への応用目指す

新井達郎教授（数物系）らの研究グループは、特定の細胞内に入ると緑色に発光する特殊な蛍光物質「ツクバグリーン」を開発した。

医学や生物学では、特定の細胞を蛍光物質で「マーキング」し、観察しやすくする。2008年にノーベル化学賞を受賞した下村脩氏らが発見した緑色蛍光タンパク質（GFP）もマーキングに使われる蛍光物質の一つで、さまざまな研究で用いられている。蛍光物質を用いるとがん細胞などとほかの細胞を区別できる可能性があり、現在は実用化に向けた研究も活発に進められている。

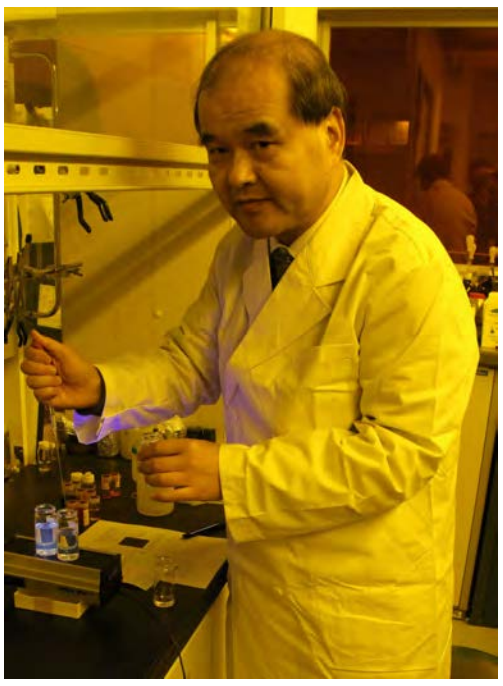
ツクバグリーンは特定の細胞に付着、内部に入り込むことで発光するようになる。ほかの蛍光物質と違い、遺伝子操作などの手間がかからないため、効率的に研究を進められる可能性がある。

画期的な蛍光物質になりえるものだが、実は偶然の産物なのだという。医学などの研究者とほかの研究をしていた過程で、ツクバグリーンのもとになる物質が偶然生み出された。「新しい発想で研究し、偶然見つけた現象を大事に育てていくことにより、思いもよらない大きな成果が生まれることがあるのも化学の醍醐味」（同教授）。

ツクバグリーンは現在も新井教授ら化学の研究者と、医学の研究者との共同研究が続けられている。化学の研究者がツクバグリーンのもととなる物質を合成し、医学の研究者が、その性質を分析。それをもとに化学の研究者が問題点を改良する……。ツクバグリーンの開発は化学と医学のどちらが欠けても成し得ないものだ。

新井教授は「共同研究は、異なる学問分野の研究者が、お互いの知識や技術を結集して考えることで成功する。今後も実用化に向けて共同研究を進めたい」とした上で、「緑色だけでなく、自在に発光色を選べるように一連の蛍光物質を作り出したい」と話した。

がん研究など、さまざまな研究の現場で「ツクバ」の名を冠した蛍光物質が活躍する日も近いかもしれない。（関根岳＝社会学類3年、写真も）



蛍光物質ツクバグリーンを研究する新井教授（11月28日、自然系学系C棟で）

## 卒業生からの手紙

### 他人の生きづらさ感じ

弁護士 山田恵太さん

筑波大学新聞、こんな新聞があるなんて！。恥ずかしながら、今回の原稿の依頼を受けるまで、全く知りませんでした。せんえつながら、寄稿させていただきます。

私は、2004年に人間学類（現在の人間学群心理学類）に入学し、心理学や特別支援教育を学びました。そして、大学の授業や、サークル（社会福祉研究会）での活動を通じ、障がいのある方がさまざまなトラブルに巻き込まれやすいという現実に触れました。そこで、私は、障がいのある方たちに対して、法律的な面から支援をしたいと考えるようになり、卒業後、法科大学院へと進学しました。法律という道具が、障がいのある方たちを取り巻く現在の社会を変えるために、一つの力になるのではないかと考えたのです。

現在は、弁護士として、東京にある弁護士法人北千住パブリック法律事務所で働いています。仕事の内容は、離婚、交通事故、刑事事件、債務整理などさまざまです。もちろん、障がいのある方に関する事件にも取り組んでおり、特に、罪に問われた障がいのある方の支援について、自分のライフワークとしていこうと思っています。

実際に働いてみて感じることは、障がいのある方に対する社会の理解のなさです。障がいは、社会のバリアによって生み出されるものです。しかし、このバリアはいつまで経ってもなくなっていません。「障がいのある人は危険だから、地域に住んで欲しくない」なんて言葉を聞くことも、珍しいことではありません。このような現実には、衝撃を受けます。

みなさんの中にも、今まで障がいのある人と関わったことがなく、なんとなく「避けたい」だとか「何もできない人たちだ」などという感覚があるかもしれません。私の言葉だけで、その感覚が変わることはないでしょう。しかし、このような考えを持っていることは、とても悲しいことだと思います。ぜひ、自分とはちょっと物の感じ方や表現の仕方が違う人がいること、そして、その方たちが大きな生きづらさを抱えていることを頭の片隅に置いていただければと思います。（平成19年度人間学類卒）

# 61年ぶりの大学日本一

## 笹山が最優秀選手賞受賞

満田丈太郎（体専2年）が巧みなドリブルで攻め込む（11月30日、東海大戦で）

バスケ

【国立代々木競技場第2体育館（東京都渋谷区）で大西美雨＝社会学類1年、写真も。12面に関連写真】大学日本一を決める全日本大学選手権の決勝戦が11月30日に行われ、筑波大は東海大に67―57で勝利し、前身の東京教育大時代を含めると61年ぶりの優勝を果たした。最優秀選手賞にはキャプテンの笹山貴哉（体専4年）、優秀選手賞には坂東拓（同4年）、杉浦佑成（同1年）が選ばれた。

順調に勝ち進んだ筑波大は、決勝で大会2連覇中の東海大と対戦。今季の公式戦で1勝2敗と負け越している相手だが、積極的に攻め、流れをつかんだ。

筑波大は第1ピリオド、馬場雄大（同1年）のシュートで先制。中盤以降、東海大が巻き返してきたが、第2ピリオド終了時には30―19と、リードを広げた。

第3ピリオド序盤、東海大に3Pシュートを決められ、流れは東海大に傾き、開始4分で同点に追いつかれた。だが馬場のシュートで勝ち越すと、その後も得点を重ねた。

第4ピリオドは、フリースローを確実に決め、最後は笹山のシュートで粘る東海大を振りきった。

坂東は『筑波大』としては初優勝で誇りに思う。周りの人への感謝の思いでいっぱいだ」と話した。

吉田健司監督（体育系・准教授）は「全員で優勝を目指してきた。61大会ぶりということで、今までできなかったことを達成できてよかった」と語った。

## 観戦記

### 信頼関係の強さ感じた

全日本大学選手権の決勝戦で感じたのは、筑波大の上級生と下級生の信頼関係の強さだった。

決勝戦前の円陣では越智大輝（体専4年）が「なんとしてでも引っ張っていくから、ついてこい」とチームを鼓舞した。試合後、坂東拓（同4年）は「最上級生の自分たちが上を向いて引っ張っていく気持ちでプレーした」と振り返った。日本一は先輩・後輩間でも意見を積極的に交わしてきた結果だ。

決勝で戦った東海大は筑波大と同じ関東大学リーグに所属し、現4年生が2年生のころ新人戦の決勝戦で敗れた相手だ。その時から4年生は東海大を破ることを目標の一つにしてきた。「（最後の大学選手権は）なんとしてでも勝ちたい」（笹山貴哉＝同4年）という4年生の強い思いが、チームを引っ張る原動力となった。

一方、下級生も上級生の思いに「坂東さんや笹山さん、周りの人に支えられてきた。先輩についていけば日本一になれると信じていた」（馬場雄大＝同1年）と奮起。1年生ながらスタメンで出場した馬場は、何度もリバウンドで東海大からボールを奪うなど貢献していた。

筑波大は今年、5月から6月にかけて行われた選手権大会で27年ぶりの準優勝を果たすなど躍進した。その理由の一つは、馬場や杉浦佑成（同1年）ら下級生の活躍だ。全日本大学選手権の試合後の記者会見で坂東は「勝ち続けるチームであってほしい」と後輩への思いを語った。思いを引き継いだ下級生の今後に注目したい。（大西美雨）

# 関東対抗戦5位

## 立教大には圧勝

ラグビー

【熊谷ラグビー場（埼玉県熊谷市）で山野辺拓実＝社会学類1年、12面に関連写真】関東大学対抗戦が9月13日から行われている。開幕から4連敗するなど不振が続いていた筑波大は、11月23日に立教大と対戦し、106―7で圧勝した。筑波大は12月4日現在、8チーム中5位と、昨年の3位には及んでいないが、大学選手権出場圏内を維持している。

熊谷ラグビー場（埼玉県熊谷市）で迎えた立教大戦は終始筑波大のペースだった。前半序盤の立教大の猛攻を防ぐと、8分に竹田祐将（体専3年）、11分に高屋直生（同1年）などが次々にトライを決めた。39分に取りこぼしたボールを立教大に奪われ失点したものの、44分に稗田優志（同3年）が得点を奪い返し、40―7で前半を終えた。

後半は開始早々に山内俊輝（同3年）がいきなりトライ。さらに猛攻を続け、2分に福岡堅樹（情科3年）、8分には橋本大吾（体専3年）がそれぞれトライを決めた。筑波大は攻撃の手を緩めず、15分には福岡がディフェンスの隙を突いてそのままゴールラインを越えた。22分に亀山雄大（同1年）が得点を重ね、さらにリードを広げた。24分ごろから立教大にゴールまで迫られたがすぐに体勢を立て直し、亀山宏大（同3年）や福岡が立て続けにトライを決め、大勝した。

試合後、古川拓生監督（体育系・准教授）は「（今回の試合では）タックルで相手の選手を倒して攻撃を防げた。日ごろタックルを重点的に練習しているので、成果が表れた。けがをしていた主力選手が復帰しつつあり、チームに勢いが生まれている」と話した。

関東大学サッカーリーグ

# 試合終了間際に逆転許す

## パスサッカー展開できず

【古河市立古河サッカー場（茨城県古河市）で森脇慎＝社会学類2年、写真も】中山雅史、井原正巨など、多くの日本代表選手を輩出してきた筑波大蹴球部の2部降格が決まった。残留圏内の10位で11月15日の最終節を迎えたが、残留を争う11位中央大との直接対決で、試合終了間際に勝ち越され、敗北。引き分けでも残留だったが、ピッチが荒れていた影響もあり、持ち味のパスサッカーを展開できなかった。

鋭いドリブルで相手を引き離す若杉（11月15日、中央大戦で）

筑波大は前半11分、ゴール前でフリーキックを獲得すると、車屋紳太郎（体専4年）が蹴ったボールが相手選手に当たり、オウンゴールで先制点を挙げた。

後半序盤は筑波大が主導権を握り、若杉拓哉（同3年）や中野嘉大（同4年）、中野誠也（同1年）ら前線の3人が立て続けにゴールに迫った。だが、追加点を奪えずにいると、23分、中央大のコーナーキックから失点。その後も激しい攻撃にあったが、GKの岩脇力哉（同3年）や、主将のDF片岡爽（同4年）を中心に懸命に守った。

攻撃陣も残留を確実にするため、最後まで追加点を狙った。だが、後半アディショナルタイム、筑波大のゴール前に上がった浮き球を相手FWが頭で触り、そのボールが岩脇の頭上を越え、1―2と逆転された。試合終了間際は、全選手が相手陣内に入り、総攻撃を仕掛けたが結局報われず、降格が決定した。

指揮を執った小井土正亮ヘッドコーチ（体育系・助教）は「後半のチャンスで追加点を取れなかったのは痛かった。最後の失点は、このまま（同点で）終われればいいという気持ちの甘さが出たのかもしれない」と悔しさをにじませた。

試合終了後、落胆した表情を浮かべる部員やサポーター（11月15日、中央大戦で）

関東大学サッカーリーグ＝1924年に創設されたア式蹴球東京コレッジリーグが前身。41年に関東大学リーグに名前を変え、戦中の休止後、46年に再開された。年末に行われるインカレ（全日本大学選手権）の歴代の優勝校65校のうち、同リーグ参加校が56回制覇するなど、強豪が集まるリーグとして知られている。筑波大は前身の東京高等師範学校、東京教育大時代を含め、通算14度優勝（早稲田大に次ぐ2位）。今回が戦後初めての降格となる。

## 記者の目

### 開幕ダッシュの失敗響く

筑波大蹴球部は中央大戦で後半アディショナルタイムに決勝ゴールを許し、戦後初の2部リーグ降格が決まった。この結果を招いた最大の要因は、開幕ダッシュの失敗にある。

春に行われたリーグ前半戦は1勝8敗2引き分け、勝ち点はわずかに5と最下位に沈み、最終戦の第11節、流通経済大戦まで勝ち星を挙げることすらできなかった。中山雅雄監督（体育系・准教授）は「チャンスを作ることはできていたが、それを生かし、ゴールを決めることができなかった」と不振の理由を語る。実際に得点はリーグ最低の7点と苦しんだ。

開幕ダッシュの失敗には、体制の変化が影響した。筑波大は今年2月に就任した小井土正亮ヘッドコーチ（体育系・助教）が実質的な指揮を執る新体制でシーズンを迎えた。小井土ヘッドは、今まで風間八宏元監督（現・J1川崎フロンターレ監督）と中山監督が築いてきた「パスを回し、試合の主導権を握るサッカー」に加え、選手の特徴を生かすようなサッカーを目指した。だが「前年と同じ体制でリーグに臨んだほかのチームに比べ、戦術が浸透していなかった分、出遅れてしまったのかもしれない」（小井土ヘッド）

後半戦は4勝を挙げ、得点も16点と前半戦の倍以上を稼ぐなど復調。だが前半戦の不振が尾を引き、降格を招いてしまった。また、残留を争っていた桐蔭横浜大と中央大に敗れるなど、勝負所で勝てなかったことも降格の大きな要因となった。

来季は戦後初めて2部で戦うことになるが、明るい材料もある。今季初めから活躍し、チーム最多の7得点を挙げたFWの中野誠也（体専1年）や、3試合連続ゴールを決めたMF戸嶋祥郎（同1年）、また守備の要となるGKの岩脇力哉（同3年）、センターバックを務めた早川史哉（同3年）と西村洋平（同3年）など、主力選手の多くがチームに残る。中央大戦後、小井土ヘッドは「（来季の）1部復帰は目標ではなくノルマ」と宣言し、中野誠也も「圧倒的な強さで1部に戻ってきたい」と力強く語った。その目はすでに前を向いている。

Jリーグでは柏レイソルやサンフレッチェ広島など2部に降格しても、それまでの自分たちのサッカーを信じて向上させ、1部で優勝する強豪に成長したチームもある。筑波大も、この降格を糧にして、パスをつないで試合の主導権を握るサッカーを貫き、まずは1年での1部復帰というノルマを達成してほしい。その先には、今季のスローガンに掲げていたリーグ優勝、そして2003年以来となる大学日本一の「奪還」が見えてくる。（森脇慎）

全日本剣道選手権

# 竹ノ内 最年少優勝

デザイン＝姉崎信（心理学類2年）

## 学生の優勝は43年ぶり

【ボディメーカーコロシアム（大阪市浪速区）などで小野憲司＝社会学類1年、写真も】11月に行われた剣道の3つの大会で筑波大の活躍が続いた。全日本選手権では竹ノ内佑也（体専3年）が初出場で初優勝を果たした。21歳5カ月での優勝は史上最年少で、大学生の優勝も43年ぶりの快挙。また昨年は8強止まりだった全日本女子学生優勝大会は準優勝、全日本男子学生優勝大会では3位入賞した。

## 剣道部 活躍続く

■全日本選手権

剣道日本一を決める全日本選手権が11月3日、日本武道館（東京都千代田区）で開催された。竹ノ内は決勝で、同じく初出場の國友錬太朗（福岡県警）と対戦。國友に一本も奪われることなく、竹ノ内が得意のメンを2本決め、優勝した。1本目は、両者競り合う中、國友の正面から堂々とメンを決めた。2本目は、國友が技を仕掛けた直後の隙を狙った会心のメンだった。

竹ノ内は「優勝した実感がわかない。本当に運が良かった。これまでの練習の成果が出たと思う」と安堵の表情を浮かべた。

鍋山隆弘監督（体育系・准教授）は「（社会人が出場する）全日本選手権は学生にとっては出場することすら難しい。竹ノ内は初出場ながらよくやった」と語った。

■全日本女子学生優勝大会

学生剣道の女子団体日本一を争う全日本女子学生優勝大会が11月9日、春日井市総合体育館（愛知県春日井市）で開催された。筑波大は、決勝進出を果たすと、今年9月に関東大会決勝で敗れた法政大と対戦。法政大に一歩も譲らず、大将戦まで1対1の引き分けに持ち込んだ。だが、代表戦で一本奪われ、筑波大は惜しくも準優勝となった。

■全日本学生優勝大会

学生剣道の男子団体日本一を決める全日本学生優勝大会が11月16日にボディメーカーコロシアム（大阪市浪速区）で開催された。

筑波大は序盤から順調に勝ち進んだが、準決勝の鹿屋体育大戦は接戦となった。序盤、筑波大は2本先取されるも、後半、副将の竹ノ内と大将の佐藤弘隆（体専4年）が巻き返し、大将戦までの総取得本数が同数となった。最後の一本勝負で、竹ノ内がメンを奪われ、惜しくも決勝戦進出を逃し3位入賞となった。佐藤は「今回は日本一を逃してしまった。後輩たちには来年、優勝を目指して頑張ってほしい」と語った。鍋山監督も「大将戦まで引き分けだったのは痛恨のミス。あと一歩だっただけに惜しい」と振り返った。

鋭く得意のメンを打ち込み、勝利する竹ノ内（右）（11月16日、全日本学生優勝大会で）

## 顔

全日本剣道選手権で史上最年少優勝

### 竹ノ内 佑也（体専3年）

## 最後まであきらめない

今年11月の全日本剣道選手権で21歳5カ月の史上最年少優勝を果たした。学生の優勝も43年ぶりの快挙。社会人が多く出場し、学生が勝ちづらいといわれる全日本選手権。初出場ながら、決勝で鮮やかにメンを2本奪った剣さばきは、日本の剣道界を席巻する。筑波大剣道部の要にして、日本剣道界のホープだ。

宮崎県出身で、3歳のころから剣道を始めた。きっかけは、父が師範を務める近所の道場に連れて行ってもらったこと。「あまり覚えていないが、足さばき（剣道の動作）を練習していたそうです」と振り返る。稽古中の父は、同じ道場に通う子どもと同様に厳しく指導した。道場では「先生」と呼んでいた父からは、多大な影響を受けた。「やられたらやりかえす。何度でも起き上がる」と負けず嫌いな心はここで育った。

その後も小中高と剣道一筋。「大きな挫折はなつであるインターハイ優勝を果たすなど、輝かしい成績を残した。この活躍を見た鍋山隆弘監督（体育系・准教授）から筑波大に誘われた。筑波大では、全日本学生剣道東西対抗試合で3年連続の優秀選手に選出。昨年11月の全日本学生剣道優勝大会の決勝では、優勝を決める一本を奪うなど活躍を見せている。

信条は「あきらめない心」。

「どんなに相手が強くても最後まで何が起こるかわからない」。この精神が最後まで勝機を逃さず、彼を日本一へと導いた。自分の考えを貫く剣道も持ち味。「指導者から言われるままに練習するのではなく、自分なりに考えて実践することが大切」で「違和感があれば、その練習を拒む」こともある。

剣道をやる上で心の支えとなってきたのは、どんな時でも応援に駆けつけてくれる家族だ。「試合の度に来てくれる。いつも応援してくれて感謝している」と道場での険しい表情とは違った一面を見せる。全日本選手権の試合直前には、都合がつかず応援に来られなかった姉から、「頑張れ」と一言連絡があった。「試合をする上で励みになった」と話す。

今後の目標は、来年5月に東京で行われる世界選手権出場だ。今回の全日本選手権の優勝で日本代表に大きく近づいた。すでに昨春から世界選手権の強化合宿に参加している。「日本代表入りし、世界の強豪に勝つには、さらに技術を向上させなければいけない」。彼の剣道にかける不屈の精神は、どんな強豪を前にしても揺らぐことはない。

（小野憲司＝社会学類1年、写真も）

# 「応用力身につけて」

今春から筑波大学大学院で学ぶ工藤公康氏（体育1年）は、大学生活について「考えることが子どものころから好きなので、刺激的で楽しい。入学して良かった」と語った。また「講義で聞いた内容を、常に野球に応用することを考えている」といい、学生にも「応用力を身につけてほしい」と話した。工藤氏との一問一答は次の通り。

（鈴木拓也＝人文学類3年）

応用力の重要性を語る工藤氏（12月2日、総合研究棟Dで）＝田中開撮影

**――大学院への入学理由は。**

野球界では、けがのケアなどの面で、科学的なことはあまり普及していない。現役のころから、それを勉強して野球界に持ち込みたいと考えていました。

ベテランになればなるほど、そういう気持ちが強くなりました。そこで引退後、20代のころからトレーニングを指導してくれていた白木仁先生（体育系・教授）に相談し、入学しました。

**――筑波大の学生生活は。**

大学の近くに部屋を借り、自転車で通っています。今は1週間に10コマほど授業を受けていて、授業の合間には復習をしています。

特に解剖やトレーニング学の授業が面白い。野球に関係ないことでも、野球にどう応用できるかを常に考えています。

学んだことは野球教室などに生かせていますし、大学っていいなと思いました。

**――学生との交流は。**

親子ほど年が離れていますが、同じ授業を受講している院生とは話したり、質問されることがあります。

（旅先の）お土産を渡したり、月に一度くらい、食事会を開くこともあります。

**――大学院の研究対象は。**

「子どもたちのけが予防」です。ボールの投げ過ぎで肩や肘を壊してしまう子どもが非常に多い。それを知り、勉強し始めました。学会に行くこともあります。

よく「投げ過ぎが原因なら、投げなければいい」といいます。でも、投げなかったら技術は向上しません。それならどうすればいいのか。そのことをもっと研究したいと思っています。

ソフトバンクの監督を引き受けたので、しばらくはできませんが、将来的には筑波大に戻って研究したい。

**――ソフトバンクの監督就任に迷いは。**

今年大学院に入学したばかりで、野球少年のけが予防についての研究を深めるつもりだったので迷いはもちろんありました。

監督就任の話は10月に王貞治ソフトバンク球団会長からありました。王会長とはダイエーで5年間やってきて、苦しいことも一緒に経験してきた。恩をいつか返さないといけないと思い、決断しました。

**――学生へのメッセージを。**

応用力を身につけてほしい。例えば講義では、先生の話をただ聞くだけでなく、それを自分なりに考え、応用していくのが重要。自分の中の引き出しを広げていってほしい。

工藤公康（くどう・きみやす）

1963年、愛知県生まれ、51歳。愛知・名古屋電気高（現愛工大名電高）から82年にドラフト6位で西武に入団。95年にフリーエージェントでダイエー（現ソフトバンク）、2000年に巨人に移籍した。11年に現役を引退。歴代1位の実働29年で通算224勝をマークした。引退後は野球解説者として活動し、人間総合科学研究科でスポーツ医学などを学んでいる。今年11月にソフトバンクの監督に就任した。

## 記録ファイル

◆柔道 全日本体重別選手権（11月8―9日、千葉ポートアリーナ）【男子】90キロ級 小林悠輔（体専3年）3位【女子】52キロ級 内尾真子（同1年）3位◆オリエンテーリング 全日本ミドルオリエンテーリング大会（11月9日、埼玉県大里郡）【男子】▽M21A―1 田中基成（地球2年）35分47秒＝8位▽M21A―2 村瀬貴紀（同3年）35分16秒＝7位▽M20A 小林大悟（心理1年）26分10秒＝7位【女子】▽W20A 鈴木直美（地球1年）28分16秒＝2位◆ハンドボール 全日本学生選手権（11月22―26日、岐阜メモリアルセンターほか）【女子】筑波大42―19環太平洋大短期大学部▽筑波大31―16東北福祉大▽筑波大30―22関西大▽筑波大17―19大阪教育大＝3位▽優秀選手賞 林るうな（体専4年）◆バスケットボール 全日本大学選手権（11月24―29日、国立代々木競技場第二体育館ほか）【女子】▽筑波大76―70立命館大▽筑波大73―51中京大▽筑波大70―7白鷗大▽筑波大62―100大阪人間科学大▽筑波大73―52順天堂大＝7位

社会貢献プロジェクト10周年

要介護予防支援

# 住民を健康アドバイザーへ

## 主体的活動を支援

茨城県内随一の高齢者の町、大子町（茨城県北西部）。高齢化率35％以上というその町では毎週のように、地域の老人センターや温泉施設で、住民がボランティアとして「要介護予防」のための健康運動教室を開く。転倒しにくい歩き方や、健康診断の検査値の見方など、実用面を重視してさまざまな講義や実技を行っている。その知識や、やり方を指導してきたのは筑波大学だ。

田中喜代次教授（体育系）らは2008年から、「地域住民の要介護化予防支援体系の構築」と題し、大子町の住民を「だいご健康づくりアドバイザー」として養成する社会貢献プロジェクトを続けている。40～80代の男女を対象に年に8回研修会を開き、6年間で計53人のアドバイザーを育成した。研修後、筆記試験に合格すれば正式にアドバイザーとして認定され、指導ができる。

アドバイザーになった後も、簡単な体力測定の仕方やより分かりやすい講義の仕方などを教わる「スキルアップ研修」に年4回参加する。研修会に参加したアドバイザーの住民は「人前で話をするのは苦手だったが、少しずつ慣れ、自分も楽しめるようになった」「教室の雰囲気をつかんで、参加者の体調に気遣えるようになった」と指導力の向上を実感した。

田中教授は、約30年前から県内外の約20の市町村で住民の健康づくり支援活動を行ってきた。「教室を開いても若い人はほとんど来ない。しかし健康で長く生きることは難しいということに気付き、早くから健康を気遣っていくことは大切だ。住民同士で定期的に教室を開くことで、健康意識を高めていってほしい」と語る。

大子町での取り組みは2013年、筑波大から地域との連携を最も進めた団体に贈られる「つくば・地域連携推進賞最優秀賞」を受賞。高く評価されてきたこのプロジェクトは、今年で最終年度を迎える。当初は筑波大が中心となり活動してきたが、今では町の職員がアドバイザーに、健康運動教室を開いてほしい地域の老人会を紹介するなど、行政と住民がうまく連携を取り活動を行っている。

田中教授は「町のことを一番知っているのは、その町の住民。大学側はいつまでも干渉するのではなく、あくまでも住民が健康の大切さに気付くきっかけであるべきだ。住民が協力し合い、自発的に活動を続けることが大事だ」と語る。今年で社会貢献プロジェクトとしての活動は終わるが、今後も研究室として見守り応援をしていくつもりだ。（油布知夏＝人文学類2年）

「大子町健康づくり講演会」で研究員から運動指導を受ける大子町住民＝田中研究室提供

# 福島にどんぐりを贈ろう

デザイン＝姉崎信（心理学類2年）

医学医療系の災害精神支援学講座と芸術系の創造的復興プロジェクト（CR）が、昨年秋以来、福島県の子どもたちにどんぐりを送り続けている。放射能の影響で「地元のどんぐりで遊ぶのは不安」という保護者の声に応えたもので、子どもたちは送られたどんぐりの感触に大喜び。どんぐりを使い、クリスマスの飾りなどを作ったという。（新田萌夏＝社会学類2年）

被災地の子どもとどんぐりで遊ぶ佐藤さん（右）（11月25日、南相馬市鹿島保健センターで）＝佐藤里美さん提供

## 学生と被災地つなぐ

きっかけは、筑波大学で災害精神支援学を教える鈴木吏良（りら）助教（医学医療系）が、月に一度訪れる「相馬広域こころのケアセンターなごみ」（福島県相馬市＝NPO法人が設立）での支援活動。震災後、「なごみ」では子どもたちの遊び場を提供してきたほか、精神科医らが育児相談も受けている。

昨秋、鈴木助教は育児相談に協力するため、「なごみ」を訪問。その際に「なごみ」で働く保育士の佐藤里美さんに、「どんぐりがほしい」と言われた。佐藤さんは子どもたちに季節感のある遊びをさせていたが、震災後は放射能の影響を心配する保護者に配慮し、それまで行っていた地元のどんぐりや松ぼっくりを使った遊びができなくなっていた。

要望を受け、鈴木助教は昨秋、「学内に落ちているどんぐりを拾い、それを送ったらどうか」と、芸術を通じて復興を支援するCRに提案。「TDPつくばからどんぐりを送ろうプロジェクト」として、CRの研究員を中心に、筑波大の大学会館や大学病院そばなどでどんぐり拾いが始まった。

拾ったどんぐりはダンボール一箱分。それを送ったところ、子どもたちは大喜びで、久しぶりに会ったどんぐりを眺めたり、触ったり、夢中になっていたという。佐藤さんは「福島を忘れてはいないというメッセージが込められているようでとてもうれしかった」と話している。

鈴木助教によると、今年は同プロジェクトで学生に広く協力を求めており、すでにどんぐり拾いを行って、現地に送ったという。同プロジェクトでは月曜4限に5C416で行われる「災害精神支援学」の授業で、拾ったどんぐりを回収している。

鈴木助教は「子どもに喜んでもらえるだけでなく、学生と被災地をつなぐことができてうれしい」と話している。問い合わせ＝disasterpsychiatry@md.tsukuba.ac.jp

## 秋空の下スポーツ楽しむ

### 「例年以上の盛り上がり」

第38回秋季スポーツ・デーが11月15―16日に陸上競技場など学内20カ所以上で行われた。バレーボールや駅伝など事前登録が必要な「正式種目」や、体操部やアーチェリー部などの体験ができる「サークル企画」などがあり、絶好のスポーツ日和の中、多くの学生や教職員が汗を流した。

15日には陸上競技場などで、スポーツ・デー学生委員会が主催する「学生委員会企画」が行われた。同企画は事前登録が不要で、参加者はミニバスケットボールやスポーツチャンバラなどを気軽に楽しんだ。バレーボールに参加した女子学生は「スポーツを通して、普段とは違う仲間の姿を見ることができて楽しかった。より絆が深まったと思う」と笑顔で話した。

学生委員会委員長の根本照久さん（工シス3年）は「例年以上の盛り上がりだった。来年以降もスポーツ・デーに参加し、スポーツの楽しさに触れてほしい」と語った。（大西美雨、写真も）

「スポーツチャンバラ」を楽しむ参加者（11月15日、陸上競技場で）

## つくば駅に新ビル

### 筑波大も情報発信

つくばエクスプレスつくば駅前に来年9月開業予定の複合商業施設「BiVi（ビビ）つくば」の工事が進んでいる。

同施設は5階建てで、延べ床面積は約8560平方メートル。筑波大学やつくば市のスペースのほか、飲食店や保育園、学習塾、医療機関など約40のテナントが入る予定。

筑波大のスペースは同施設の2階に置かれる。大学案内の資料や入学願書を配布するほか、オリジナルグッズの販売も検討。隣に位置するつくば市のスペースも活用し、研究者と一般市民が科学について語り合うイベント「サイエンスカフェ」の開催なども予定している。

つくば市から依頼を受けて、渡和由准教授（芸術系）らが同施設を含めた駅周辺の空間デザイン企画を担当した。同准教授の提案で、筑波大とつくば市のスペースの間には仕切りを設けず一体感を持たせたり、壁面をガラス張りにするなど開放的なデザインを採用。同准教授は「通過するだけではなく、気軽に立ち寄ってリラックスできる交流の場にしたい」としている。

筑波大の広報室は「施設の活用について、学生からもアイデアを出してほしい」と話している。（廣岡里穂）

留学生の目

ダウィト・フィセッハ

# 日本は魅力的な国

私の筑波大学での学生生活は、今までで最も記憶に残る時間です。家族と離れ、留学生として暮らすのは大変ですが、好意的で優しい社会に支えられ、私の日本での生活は想像したより素晴らしいものになっています。

筑波大は勉強することだけでなく、生活するうえでも最良の大学だと思います。初年度に取った講義では、日本の歴史と文化、風習を学びました。この2年3カ月で、私はアジア、特に日本についての知識を得ましたが、さらに深く知りたいと関心を持ち続けています。日本語の学習は、留学生として日本で生活するために、なくてはならないものです。日本語ができれば、日本人の同級生や教授との仲を深めたり、アルバイトをして経済的な余裕をつくることもできます。

また、日本の教育が高い水準にあることも分かりました。現代的な科学技術の設備に支えられた指導方法や、教育のレベルの高さで、右に出る国はありません。そんな筑波大だからこそ、将来のキャリアで必要な知識を身につけることができたのだと思います。地球規模の紛争や、それらを解決する効果的な方法を分析し、国際関係について多くのことを理解することができました。

授業でも、多くの魅力的な体験をしました。印象深いのは、初年度に日本の歴史の授業で、茶道の歴史的な背景を学んだ時のことです。祖国のことを思い出しました。エチオピアでは定期的にコーヒーの儀式を行います。儀式では、新鮮なコーヒー豆が焙煎・抽出され、訪問者の右前に淹れられたコーヒーが置かれます。日本の茶道に少し似ていると感じ、興味深かったです。また驚くことに、私が祖国の人々について日本人に話すたびに、彼らは決まって1964年の東京オリンピックのマラソンで金メダルを獲得したアベベ・ビキラというエチオピア人の選手の話をするのです。私は、日本人のアベベに対する尊敬や愛に驚かされました。10月15日に、私は榎本靖士准教授（体育系）と、アベベの優勝50周年を記念したイベントに招待され、参加してきました。セレモニーを通して、私は日本人がどれほどマラソンを愛し、アベベを尊敬しているかを実感しました。

日本は、住んでいる人全員が充実した生活を送れる、安全で魅力的な国だと思います。筑波大に来た留学生が、快適な環境で暮らせることを願っています。（国際総合学類3年・原文は英語＝エチオピア出身、日本語訳・田中開＝教育学類1年、イラスト・姉崎信＝心理学類2年）

# BBCニュース放映

## 「国際学を学ぶ学生 応援したい」

### 3K棟で

今年4月、第三エリアK棟（3K棟）に設置された、イギリスのニュース番組「BBCワールドニュース」を放映するテレビモニターが好評だ。国際総合学類の教員が中心となって企画したもので、国際学を学ぶ同学類の象徴として注目されている。企画した教員の一人、前川啓治教授（人社系）は「大学の国際化を進めるため、学内のほかの教室棟や施設にもモニターを設置して共同利用してほしい」と話している。

（井口彩＝社会学類2年、写真も）

設置されたテレビモニターでBBCニュースを視聴する前川教授（11月20日、3K棟で）

「BBCワールドニュース」はイギリスの公共放送「BBC」が配信する。世界200以上の国や地域で視聴されている。玄関近くに設置されたテレビモニターで学生は常時、英語のニュースを見ることができる。

きっかけは、2013年に国際総合学類が創設30周年を迎えるにあたり、同学類の教員が「3K棟をより国際総合学類らしくしよう」と提案したこと。その後、同棟の玄関の整備が行われ、同学類の同窓会からの寄付をもとにBBCニュース放映が実現した。

前川教授は「英語で学ぶ留学生にも好評」とした上で「世界中の情報を提供することで、国際研究に高い意欲を持つ学生をサポートしていきたい」と語った。

# ビジネスプランを発表

7月に開かれたビジネスコンテスト「Tsukuba Creative Camp（TCC）」で入賞したビジネスプランの発表会が11月2日に大学会館で行われた。優秀プランのプレゼンテーションのほか、LINE社社長の森川亮氏（昭和63年度情報学類卒業）と発表者のパネルディスカッションや、学生起業家を支援する筑波大の取り組みの紹介も行われた。

3人の発表者のうち、TCC準優勝の三井紳碁さん（生資4年）は廃棄される野菜を有効活用するビジネスプランを考案。形や大きさが規格外のため、これまで廃棄されていた未利用農産物を小規模農家から買い取り▽屋台で販売▽安価で飲食店に卸す▽加工食品を作る……などして活用するプランを発表した。現在、三井さんらのグループは、つくば駅周辺や筑波大学内などで販売活動を行っており、つくば市内でビジネスモデルを確立した後は全国展開も計画しているという。

またパネルディスカッションでは、発表者の幼少期の夢や学生生活の過ごし方などについて話が交わされた。来年7月から有床診療所と有料老人ホームを始める予定の伊藤俊一郎さん（人間総合3年）は、起業する理由について「病院での勤務中に医療現場のあり方に問題を感じ、自分の手でなんとかしたいと感じた」と語った。

その後、国内の大学では初となるクラウドファンディングサービス「筑波フューチャー・ファンディング」について、団体の代表理事、佐々木敦也氏（昭和57年度社会学類卒業）が概要を説明した。同制度は筑波大の学生・卒業生・教員らの起業・新規事業に対し、インターネットを介して卒業生を中心とした一般市民に広く資金援助を募るというもの。

発表会を訪れた永田恭介学長は「TCCを通して参加者が成長していることが、とてもうれしい。TCCで生まれた小さなアイデアは社会を良くすることにつながるはずだ」と話した。

（齋藤優斗）

つくば歳時記

11月23日につくば市で開催された「つくばマラソン」。雲一つない秋空の下、1万3763人のランナーが、紅葉に染まるつくば路を駆け、沿道で応援する市民に笑顔で手を振り応えた。（田中開＝教育学類1年、写真も）

# T-ACTの活動を報告

## 優秀な団体の表彰も

T-ACT（つくばアクションプロジェクト）の公開シンポジウムが、11月11日に大学会館で行われた。学生や教職員、地域の市民団体関係者など約100人が会場を訪れ、これまでの企画が紹介された。今年度のT-ACTの上半期表彰式も行われ、合わせて9団体に表彰状と記念品が贈られた。

「Women's Hackathon at Tsukuba」を企画し、最優秀賞を受賞した学生（11月11日、大学会館で）

T-ACTの企画紹介では、山下史雅さん（比文2年）が東北の被災地を訪問し被災者の話を聞く「みにぷろ-見に行こう、そして考えよう東北プロジェクト-」の活動を報告。山下さんは「（T-ACTで実際に）行動することで、さまざまな人から感想や意見を聞けた。この経験を、次の活動に生かしていきたい」と話した。

また表彰式では「Women's Hackathon at Tsukuba」が最優秀賞を受賞。同企画は、女子学生がアプリやWEBサービスなどの開発するのを手伝い、作成したアプリのアイデアを競う「ハッカソン」という催しを実施。T-ACT推進室によると「IT業界は男性ばかり」というイメージを払拭したことが評価された。（山野辺拓実、写真も）

# 筑波レガッタ

## 初心者も参加

筑波大学漕艇部が主催する「第40回水郷土浦・筑波レガッタ」が、11月8日に桜川（茨城県土浦市）で開催された。企業や筑波大から約80人が出場し、中秋の桜川を漕ぎ競った。河川敷ではバーベキューや持ち寄った楽器での演奏を楽しみつつ、ボートの初心者もレースに参加するなど、和やかな大会となった。

本大会は、漕艇部が年に1度開催するボートの大会で、普段は練習場として使用している霞ヶ浦の魅力を発信し、周辺市民に交流と運動の場を提供することが目的。初心者や高齢者でも気軽に参加できるよう、レースには競技用のボートではなく、レクリエーション用の「ナックル」というボートを使用。参加者が4人1組でオールを漕ぎ、漕艇部員が舵をとって300㍍を漕ぐ速さを競う。

出場者のほとんどは初心者だが、「水上スポーツは手が出しにくいが、この大会は初心者でも楽しく参加できるので良い機会になる」などと大会の魅力を語った。

漕艇部部長の松井裕史講師（医学医療系）は「市民の人たちがボートに触れることで水に親しみ、風を感じつつ自然と運動できるきっかけになれば嬉しい」と語った。（田中開、12面に関連写真）

# 「荷重試験」に挑む

## つくば鳥人間の会

中央図書館下通路には、おそろいの「Tsukuba Birdman Works（つくば鳥人間の会）」のジャンパーを着た学生たちが集まっていた。工程表を読み上げこの日の作業を確認する目は、真剣そのものだった。

つくば鳥人間の会は、「鳥人間コンテスト」への出場に向け、1年間かけて人力飛行機を製作している。「鳥人間コンテスト」は毎年7月に滋賀県の琵琶湖で行われる大会。飛行機にはパイロット1人が乗り込み、ペダルを漕いでプロペラを回し、空を飛ぶ。大学のサークルを中心に、自作した人力飛行機や滑空機の性能を競う。

鳥人間の会は過去に23回出場している常連で、1㌔㍍をどれだけ短い時間で飛べるかを競う「人力プロペラ機タイムトライアル部門」で2008年に準優勝、10年と11年に3位という実績を持つ。現在は来年の大会に向け、機体を製作中だ。

鳥人間の会は週に3回、午後7時から中央図書館下の作業場で機体を制作している。部員は22人で、部品の設計・作成、機体の組み立てのほとんどを部員だけで行う。翼の骨組みに当たる「桁（けた）」を作る桁班や、機速計や高度計などの電子機器を作る電装班など、6つの班に分かれている。

11月上旬、機体作りの最初の難所である「荷重試験」＝写真＝が行われた。桁に人工的に負荷をかけ、折れたり異音が鳴らないかを確かめる作業で、異常があると機体作りを進められない。部員たちは長さ25㍍の桁に重りとなる水の入ったペットボトルを取り付けていった。重りの合計は97㌔㌘。部員たちが固唾を飲んで見守る中、桁は見事なアーチを描いて静止。強度に問題が無いことが証明された。設計主任の藤原広太さん（工シス2年）は、「とても緊張した。これで安心して翼を作る工程に入れる」とほっとした表情を見せた。

今後は翼の制作が本格化する。薄い板のような部品をたくさん作り、桁に取り付け、翼を作る。会長の西永尚矢さん（工シス2年）は「前回の大会は費用などの関係で出場できず、悔し涙を飲んだ。次回こそは優勝を目指したい」と意気込みを語った。

「自分が設計・制作した機体が実際に人を乗せて飛ぶ姿を見るのが最大の魅力」と藤原さんは語る。彼らが1回のフライトのために費やした1年間は、機体が琵琶湖に着水した瞬間に終わりを告げる。しかし、その一瞬のはばたきが、見る人の感動を呼び起こす。来年7月、つくばの鳥人間たちはどんなフライトを見せてくれるのだろうか。

（山野辺拓実＝社会学類1年、写真も）

# Who's Who?

『ジャンプスクエア』などで活躍中の漫画家

## 西尾 ナノラさん（芸専2年・PN）

新作の漫画の構成を考える西尾さん（11月22日、自宅兼仕事場で）本人の意向で正面の写真は掲載できません。

2010年6月、16歳で『ヤカンのデッサン』でデビューし、人気雑誌『ジャンプスクエア』などに読切を4作掲載した漫画家。最近はシリーズ小説のカバーイラストを担当するなど、活動の幅を広げている。愛用のシャープペンシルを使い、毎日絵を描いて過ごす。

幼いころから漫画に触れてきた。初めて漫画を読んだのは6歳の時、家にあった『スーパーマリオくん』（沢田ユキオ・小学館）だった。人気ゲーム『スーパーマリオシリーズ』の登場人物が繰り広げるギャグに「こんなに笑えるものがあっていいのか」と衝撃を受けた。

しばらくすると、登場人物を使ったオリジナルの話を考え、絵を描くようになった。幼稚園で先生に褒められたこともあり、描くことに熱中。実家で経営している旅館を継ぐことよりも好きなことを仕事にしたいと、漫画家を夢見るようになった。

デビューを目指す引き金となったのは「嫉妬心」だった。

高校1年生の時、知り合いが漫画の新人賞を獲得したのを見て、「絶対自分の方が絵をうまく描けるのに」と嫉妬し、一念発起。周囲を説得し、1年で賞をもらえなければ漫画家を諦めるという条件で高校を休学し、「ジャンプスクエア Supreme Comic大賞」の入選を目指した。

しかし、これまで本格的に漫画を描いたことがなかったため、漫画用の原稿用紙の使い方すらわからなかった。そんな時に手を差し伸べてくれたのが、漫画家を目指す中で知り合った4歳上の友人だった。

「彼がいなければ、こうして漫画家になることはできなかったと思う」

賞の締め切り前は、二人で缶詰めになって漫画を描き続けた。そうしてできた処女作が、『ヤカンのデッサン』。売れない漫画家「ヤカン」が、ある日突然しゃべり出したデッサン人形と隣の部屋の女の子と共に、漫画家として、そして人間として成長していく物語だ。この作品で同賞の最年少準入選を果たし、デビューした。

漫画家はデビュー後、ノイローゼになる人が多い。

担当の編集者から与えられる締め切りや、自分の理想と完成した漫画のギャップに苦しむためだ。西尾さんも他の新人同様、ノイローゼになった。デビュー後は高校に復学したため、学業にも追われた。

『僕の夏休み』『御手洗京子と失われた古代遺産』などの漫画を発表したが、忙しい日々の中で自分の描きたいことを見失い、漫画を描いても、雑誌に作品が掲載されても楽しさを感じなくなった。特に大学進学後は、ネーム（漫画の原案）すら描けなくなるスランプに陥ってしまい、漫画家を辞めることも考えた。

そんな時にも、『ヤカンのデッサン』を描いた時に手伝ってくれた友人に支えられた。相談すると「読者に何を伝えたいのかを考えていない」と指摘され、自分のボツ原稿には話の筋が通っていないことに気付いた。

友人のアドバイスを受け、伝えたい一言が現れるシーンに向け、必要な人物や場面を積み上げるようにストーリーを考え始めた。すると漫画に筋道が通り、スランプを脱することができた。それだけでなく、「漫画の描き方がわかったような気がして、描くのが楽しくなった」と笑う。現在は5作目の漫画を執筆している。

「漫画は作者が読者に伝えたい一言を届ける手紙。自分は絵を描くことしか取り柄がなく、伝えたい言葉を文章にしても読んでもらえない。けれど、漫画なら伝わる」。

漫画という手紙に託した彼の思いは、時代を超えて多くの人に届くことだろう。

（森脇慎＝社会学類2年、写真も）

## 16歳で漫画家デビュー「漫画は思いを届ける手紙」

### 編集後記

今回のミニ特集は「ぼっち」を取り上げました。過剰に空気を読み、一人になるのを恐れる現代の若者……。インタビューなどを通じ、その実態の一端が見えました▼しかし、紙面を見て感じるのは、むしろ集団の絆です。61年ぶりの大学日本一に輝いた男子バスケ部。その勝利を間近で見た記者は「信頼関係の強さ」「一致団結」を感じたといいます。優勝後にチームメイト同士で抱き合って歓喜する姿は「ぼっち」とは対極のようにも見えます▼5面で紹介した筑波大学ときめき太鼓塾の取材記者が感じたのも、「確かな信頼」だったといいます。指揮者がいなくとも、アイコンタクトでリズムを合わせ、奏でる音楽は絆の強さを感じさせます▼太鼓塾と同じく、弊紙も今回で執行代が引退します。新執行代には、読者とのより一層の信頼関係をつくっていってほしいと思います。（編集長・平嶋健人＝社会学類3年）

次号は **1月26日（月）** 発行予定です

学芸

## ときめき太鼓塾単独公演

力強い太鼓の音を響かせる団員（11月26日、つくばカピオで）＝原啓一郎撮影

5面へ

スポーツ

## 全日本大学選手権

優勝を喜び合う吉田監督（中央）とバスケ部の部員たち（11月30日、東海大戦で）＝大西美雨撮影

8面へ

スポーツ

## 関東大学対抗戦

ゴールラインに走りこむ山内俊輝（11月23日、立教大戦で）＝山野辺拓実撮影

8面へ

学生生活

## 水郷土浦・筑波レガッタ

声を掛け合ってオールを漕ぐ参加者（11月8日、桜川で）＝田中開撮影

11面へ